

報 特 攻
 平成8年8月
 第28号

〒105 東京都港区虎ノ門
 3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊
 戦没者慰霊平和祈念協会
 電話 03-3432-1090
 編集人 田中賢一
 発行人 木村元正



平成8年4月2日
 靖國神社



庭の栢で咲いて会およ

特攻隊戦没者慰霊協会の主催するこの行事は今回で第十七回となる。三笠宮崇仁親王殿下の御台臨を仰ぎ、遺族、米賓、会員合せて約四百名参列して行はれた。

祭文

本日 三笠宮崇仁親王殿下をお迎えし陸海軍特別攻撃隊の慰霊祭を斎行致しますことは泉下の御霊もさぞかしお喜びのことと存じます

前の年 大東亜戦争終結五十周年を閲し、こゝ靖國の神社において慰霊、追悼の誠を捧げましたが、月日は巡り再び桜花咲くこの日皆様と心の語らいを得ますことは 私達の思いを深くするところでありませぬ

彼のため 皆様は至誠至純なる心をもて 若き身命を擲げうち 空に 海にはたまた地へと突入し散華されましたこの崇高なる事実は今もなお私達の胸に熱き思い出として息づいておりまさりながら共に戦いの場にありました私達は歸すでに七十路 八十路 を迎えております

私達は 皆様の烈々たるお志しを思い 悠久の大義に生きられた動しを仰え 世々に語り伝へゆく 日々努めておりますが、如何せん力足らざる処を深く憂いおるものでございます

しかしながら 滔々たる世にあって 正しき歴史を学び 皆様の心をおのが心とせんとする若人が出でつつあることを、心の底から喜び合いたいと存する次第でございます。その流れは未だ

細やかではありましようとも いずれ大河となることを信じて熄みません 私達はこの戦後五十一年を新しき門出の年として わが民族の健やかなる精神と 美しき伝統を 英霊皆様の御導きの下に生ある限り護り伝えて参りたいと祈念致しております 御霊よ 願わくはわが日本の前途に御力を添えられんことを

平成八年四月二日
 財団法人 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会 会長 頼島 龍三

目次

- 特攻隊台同慰霊祭..... 1
- B29の基地に対する昼空攻撃..... 4
- 特攻隊員の心..... 8
- 知覧特攻基地..... 10
- 知覧特攻基地慰霊祭..... 11
- 海軍特攻隊歩兵隊..... 11
- 興亜観音開祭..... 15
- 英霊にこたえる会の総会..... 15
- 「同天」出撃日記..... 16
- 第10振武隊出撃時の模様..... 22
- 寺崎名譽会長の御逝去..... 23
- 寺崎名譽会長の御逝去..... 24
- 「特攻隊史研究の一視点」に關し..... 26
- 義勇空挺隊陣前祭..... 27
- 陸軍航空隊陣前祭..... 28

祭文奏上に続いて大東亜戦争忠魂顕彰会の人達による吟詠と合唱の奉納があった。



〔献吟〕和心流宗家 八雲和心
英霊を弔う

和歌 岡崎功作

流れゆく雲を仰ぎてふる里を

しのび語らう 戦人かな

漢詩

興亡夢ノ如ク 水流レテ空シ

百戦ノ英雄 去ツテ回ラス

莫々タル 忠魂 千載ノ恨

声ヲ吞ンテ哀弔シ蒼穹ヲ仰ク

和歌

天皇の醜の御憎し誇らかに

母の送りし 濃き墨の色



〔献歌〕ゆには合唱団

合唱 荒城の月・故郷



神事終了後御遺族は三笠宮殿下を開んで記念写真を撮った

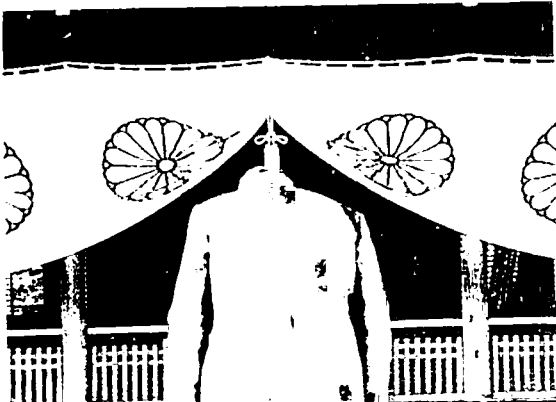


追想特別攻撃隊

——靖國の御前で——

(英霊のみ心)

- 一、祖霊まします大八州
我育みし この山河
窺う仇は 許さじと
鉄随くだす 特攻機
- 二、我がたらちねよはらからよ
いとしき人よ幼な子よ
すこさせ給え安らけく
我が春秋を捧ぐべし
- 三、あゝ悠遠の神代より
敵に踏ませし例しなく
昭和の御代に受継ぎて
歴史をなどか汚すべき
人生僅か 五十年
- 四、その半にも満たずとも
我が生涯の 並木路に
しるさむ 強き足跡を
ますらおが悲しき命つみ重ね
つみ重ね護るやまとしますねを
——三井甲之——
- 五、七たび生れ 朝敵を
打滅さんと誓いたる
祖先の血汐我が胸に
今脈々と 滾るあり
- 六、明日出撃の 命下り
静かに思う来し方の
故郷の山や 幼な顔
小鮎釣りしあの小川
- 七、海より深き父母の恩
報いることの寡くて
詫る心の 華のあと
続まるゝ姿徳びつゝ、
八、万朶の桜もののふの
赤き心の ひと筋は
南の空にあまかけり
いてや散るべし美しく
今日咲きて明日散る花の我身かな
いかでその香を 清くとどめむ
——読人不知——
- 九、我突入のひとことに
玉と砕けし現し身は
轟音裂くる 敵艦の
戦果聞くべし幽界で
——我等が思い——
- 十、花の都はやすくにの
庭の梢で咲いて会おと
誓いし友は神となり
額突く面は彫り深し
- 十一、九段の桜 棚引きて
明眸皓齒 眉秀いで
我が目底に 蘇えり
呼べば答えむ笑み湛え
十二、英魂こゝに 鎮まりて
遺香に副はぬ現し世に
我等が義憤絶えざるも
見守り給え 末永く



マリアナB-29の基地に 対する陸海軍の経空攻撃

②

行わせることになっ
た。

〔陸軍航空〕 続

飛行第百十戦隊（教導航空軍）

戦隊の創設と訓練

この戦隊は航空総監管理のもと19年10月16日浜松飛行学校に於て編成された。機種は四式重、二個中隊の整編制で、戦隊長は草刈武男少佐だった。戦隊は雷撃部隊として練成することになり、第一航空軍に編入されたが、前号で述べた通り、11月2日第二独立飛行隊がサイパン攻撃で戦力の半数を失ったので、サイパンに対する攻撃戦力を増強する為、11月7日この戦隊を教導航空軍の指揮下に入れ、サイパン攻撃にあてることになった。

戦隊は第二独立飛行隊の戦訓に鑑み同じような洋上航法の猛訓練を開始した。その後第二独立飛行隊を主体とし11月6日第二次、11月26日第三次と二回に亘りサイパン攻撃を行い、教導航空軍としては、第四次を第百十戦隊に

マリアナ基地攻撃

（戦史叢書「沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦」より転記）

戦隊の硫黄島進出 敵航空大部隊の本土空襲を近く予想させる緊迫した情勢下において、12月5日サイパン攻撃の命令を受領した飛行第百十戦隊は、翌6日新鋭四式重一〇機の翼を連らねて硫黄島に前進した。当初、浜松出発の際は第一中隊六機、第二中隊五機の予定であったが、一機故障のため出発は一〇機となった。第一航空軍司令官李王根中将以下の見送りを受け、編隊群は二二〇〇浜松飛行場を出発、一六〇〇ころ硫黄島千鳥飛行場に全機が無事着陸した。航路上の天候はほぼ晴で

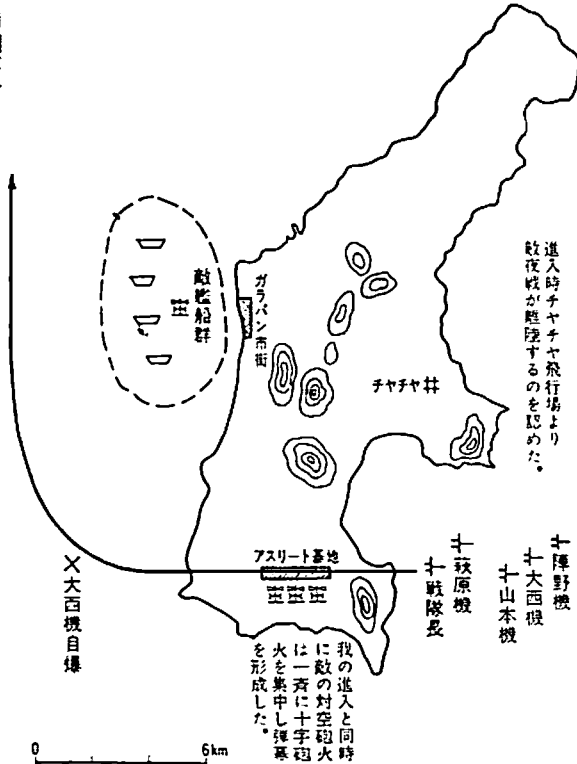
航進は順調であった。教導航空軍からは、水町参謀と岸本茂次郎軍医少佐が硫黄島に派遣された。戦隊は到着後、同行した整備員ならびに海軍部隊の援助を受け、燃料補給、信管の装着等、出動準備を迅速に完了した。この間、敵偵察機二機の空襲があったが被害は

なかった。

戦隊のアスリート飛行場攻撃 飛行第百十戦隊は、12月6日二二四〇硫黄島を離陸し、一〇機編隊でまずパガン島に向かい航進した。天候は曇、層積雲、バガン島に近づくにつれ、晴と

は雲量四、ところどころ驟雨があった。戦隊はアスリート飛行場攻撃 飛行第百十戦隊は、12月6日二二四〇硫黄島を離陸し、一〇機編隊でまずパガン島に向かい航進した。天候は曇、層積雲、バガン島に近づくにつれ、晴と

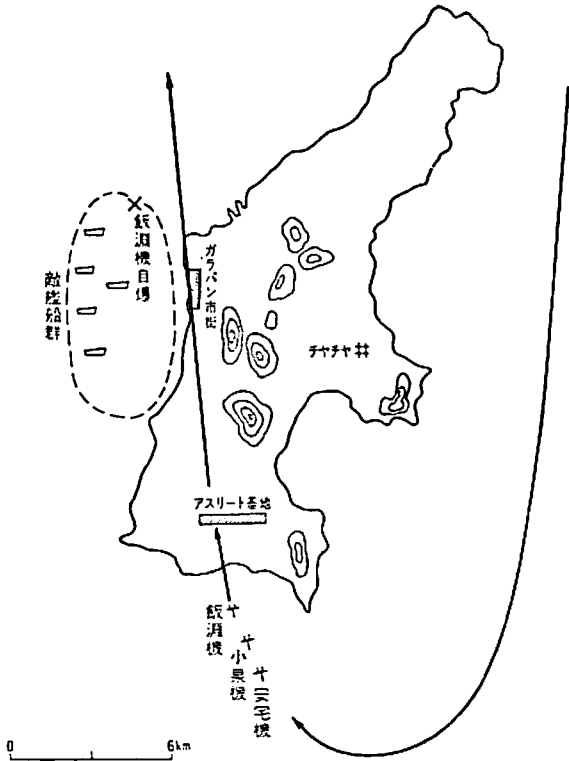
飛行第百十戦隊第一中隊
アスリート基地攻撃要図



挿図第一

飛行第一百戦隊第二中隊
アスリート基地攻撃要図

挿図第二



三〇〇米で飛行場に進入、〇三〇五各機はあらかじめ分担した地域を爆撃し、超低空全速で離脱した。なお攻撃時に各機は全機砲で在敵機を砲撃した。その攻撃状況は「挿図第一」とおりであった。

第二中隊は、第一中隊に引き続き〇三〇南方から飛行場に侵入、高度三〇〇〇四〇〇米で担任地区を砲撃した。その状況は「挿図第二」とおりであった。

B-29はわが本土攻撃の出撃準備中

であった模様で、飛行場内は昼間のようには明るく誘導路にB-29が充滿し、わが各機は目標を明確に認めつつ攻撃した。敵の対空砲火は熾烈で、戦隊長は攻撃終了直後、わが二機が被弾して自爆したのを確認した。また戦隊長機は、飛行場西側付近でトップ砲座に被弾し、白井少尉が負傷した。帰途機上において止血に努めたが、出血多量のため遂に戦死した。

この攻撃において戦隊は自爆二機を含み、計六機の未帰還を生じたが、各

機の的確な爆撃と全火力を発揚した砲撃により、帰還した二機の目視したもののだけでも、炎上大型六機、爆破大型二機、施設爆破炎上二カ所に及び、爆破一八機、大破一四機計三二機、格納庫破壊三と報じられた。本攻撃後約一週間（前回の攻撃から約一二日間）、12月15日ころまで敵の本格的な本土空襲を見なかったのである。

帰路、戦隊長機はサイパン北西空域で、敵の夜間戦闘機五機を発見して雲中に離脱した。硫黄島に帰着したのは、7日〇七〇〇〇七二〇であった。帰還したのは戦隊長機と小泉機だけであった。戦隊長は敵の追尾攻撃を顧慮し、三機（一機は途中から引き返した吉川機）をもって一〇〇〇硫黄島出發、鳥島付近の不連続線による悪天候を約一時間で突破し、一四〇〇ころ無事浜松に帰還した。戦隊長機には水町参謀が同乗していた。

本攻撃に関する戦隊長の所感 今回の攻撃で飛行第一百戦隊は、戦力の三分の二を一挙に喪失した。

この攻撃を指揮した戦隊長草刈少佐は戦後、次のように感想を述べている。

出發に際して半分は特攻の気持ちであった。行くからには何としても最大の戦果をあげねばならぬと強く心に決めていた。奇襲が成功した

にもかかわらず損害が大であったのは、時あたかもB-29の出撃準備中（推定）であったため対空砲火が準備されており、これに対し戦隊が低空攻撃を行なったためであろう。この攻撃は夜間孤島への航続距離最大の飛行であったため、航法の適否が攻撃奏功の鍵であった。比較的大きな戦果を収め得たのは、低空攻撃で全員を砲座につけ対地砲撃も併用し、徹底して実施したためであろう。

教導航空軍司令部に攻撃成功の第一報が入ったのは、7日朝であった。やがて続いて損害二機の報告、さらに午後になり損害六機となった。十分の六の損害で、その率は新海部隊の第一次と同様の損害であった。菅原軍司令官は、この攻撃実施に当たり、新設戦隊の戦力が第一撃で潰滅的打撃を受けることを最も危惧していたが、その心配が遺憾ながら的中した。草刈少佐の戦況報告を受けた軍司令官は、自爆二機のほか未帰還の大部が対空砲火にやられたものと直感した。戦隊の損害は、機上戦死を含め、将校実数十数名、合計七十余名にのぼった。

飛行第七戦隊（海軍の指揮下）

この戦隊はそれより以前雷撃の訓練を行う為に、飛行第九十八戦隊と共に

聯合艦隊の指揮下にあった。戦隊は宮崎の赤江飛行場に在って訓練していたが、12月上旬頃海軍の第三航空艦隊の指揮下でサイパン攻撃を行うことになり、千葉県の海軍香取基地に移動した。以下戦後作られた「飛行第七戦隊のあゆみ」から転記する。

昭和19年12月25日、26日夜二回に亘り、海軍の第十一航空戦隊銀河六機と第七戦隊六機計一二機をもって海軍香取基地を発進、硫黄島を中継にしてサイパン島アスリート敵空軍基地の主として在B-29を捕捉して、各機毎の高

空(八〇〇〇米)よりの緩降下による爆撃方法により攻撃を敢行した。しかしこの攻撃で第七戦隊の第二中隊長岡孝臣大尉(陸士53期)機及び山下昌文准尉機の未帰還機を生じた。後年米軍史によればクリスマス夜来襲した日本軍機の爆撃によりB-29一機は完全に破壊され、B-29三機を大破(修理不能)ほか一機に相当の損害を蒙ったと記してある。次は第三中隊付久保井(須藤)三少尉の手記である。

香取海軍基地へ前進

昭和19年12月上旬サイパン島爆撃作戦のため戦隊は宮崎基地より千葉県の海軍香取基地に移動、そこで長距離夜間航法および高々度爆撃の訓練を行っ

た。サイパン島は日本の最前線基地の硫黄島からでも往復三千料も離れており、武装したキ六七では八百立の増加タンクを両翼端に付けても、敵機の攻撃を受け三〇分以上発動機の馬力を上げると硫黄島まで帰れないと言われていた。そのため燃費を最も少なくするには、どのくらいの速度で高空レバードのくらくら迄開いたら、最も距離が飛べるかを決めるための試験飛行が繰り返された。また伊豆諸島の青ヶ島の爆撃場を利用して爆撃訓練が行われた。

サイパン島爆撃

12月25日、第三中隊の三機(島尾大尉機53期、岡田大尉機51期、山下准尉機)は、硫黄島を経由サイパン島爆撃の作戦参加のため香取を出発した。

我々が硫黄島に向っている途中、硫黄島からの無線連絡で現地飛行場は現在爆撃を受けつつあるが、爆撃終了後三〇分以内に滑走路の修復は可能との事で、そのまま進み私は岡田大尉機の副操縦をしていた。岡田機は着陸の際滑走路に飛散していた爆弾の破片で車輪がパンクしてしまい、サイパン島の攻撃には参加出来なかった。

島尾機の行動

島尾中隊長から後で聞いたその時の攻撃の様子は、午後5時頃山下機と共に

に硫黄島を出撃、サイパン島の手前のウラカス島(サイパン島の北約六〇〇軒にある小島)で機の位置を確認、サイパン島の手前二百哩から編隊を解いて各機九千米の高々度をとおり、同時異方向から緩降下爆撃の予定で、二百哩地点で編隊解散の赤白青の三つの信号板を出して合図し、高度を上げたが爆撃手(航法士)の岡部郁三中尉(陸士56期)の酸素マスクの具合が悪く酸欠で意識を失ってしまい、飛行機は電灯をつけた信号板を出したまま飛んでいったため、敵夜戦にサイパン島上空近くで攻撃をかけられた。緩降下で速度を出しながら敵機の攻撃をかわしている最中、高度が下がりがり機内の酸素が増え意識を取りもどした岡部中尉が「爆撃目標はまだか」と聞いて来たので、「馬鹿を言うな敵に追いかけてい

る最中だ」と怒鳴って、ハット信号板が出たままなのに気付き急いでそれを消し逃がした。

このままサイパンの攻撃に向えば、先刻の対空砲火や敵夜戦の様子では爆撃の成功は覚束ない、出撃前に見たサイパンテニアン航空写真では、隣接のテニアン島にも多くのB-29が所在しておったので、テニアン島に目標を変え爆撃掃射したとの話だった。

山下機の行動

その時第三中隊から二番機として攻撃に参加した山下准尉機は、サイパンの爆撃を終え硫黄島近く迄帰って来たが燃料が切れて海没全員戦死した。

山下昌文准尉は数千時間の飛行時間を待つべテランの操縦者で、丸顔の小さな体でよく面白い事を言って皆を笑わせていた。その日も陸軍大臣から「右の通り結婚を許可す」の書類が来



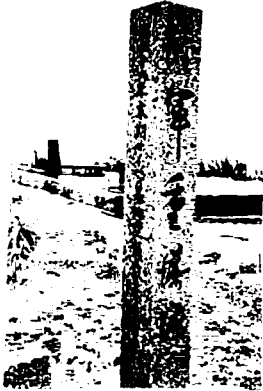
4式重(キ67)

たので、この攻撃がすんだら結婚出来ると喜んでた。同乗の航法士の石井憲三中尉は海軍予備学生出身で大そう真面目な立派な人だった。この戦開でもこの他にも多くの立派な人を失った。

この日の攻撃には我々の七戦隊の他に、海軍の銀河、一式陸攻等十数機が出撃したがその半数近くが帰って来なかった。私達が硫黄島で出撃準備をしていた時、島の守備隊の兵がサイパンを爆撃してくれるのもいいが後のしっぺ返しが怖いと言っていたが、我々がサイパン爆撃をした数日後、硫黄島は敵の猛烈な艦砲射撃と爆撃により当分の間滑走路が使用出来ない程の大きな被害を受けたため、その後サイパンの攻撃は行われなかった。(久保井手記)

久保井(須藤)少尉は特別操縦見習士官二期出身で昭和19年11月19日比島沖航空戦に岡田大尉機副操縦者として参加し、敵重巡を轟沈し武功章を受けたのを始め、サイパン攻撃に沖繩攻撃に正操縦者として屢次の攻撃を重ね赫々たる戦果を挙げた。その間度々愛機が被弾し自爆直前の危機に直面しながらもその優れた操縦技能で克服し生還した数少ない操縦者である。

当時7戦隊は98戦隊と共に海軍の指揮下に入り、宮崎県の赤江に在って雷撃の訓練を受けていた(98戦隊は鹿屋)海軍が同戦隊をサイパン攻撃に使ったことに対し陸軍側から異議を申入れたので、一回だけで取りやめになり赤江に戻った。左の絵は少飛会海法画伯の筆になる7戦隊雷撃の図。



この会報16号で既に紹介済みであるが、硫黄島には「陸軍爆撃隊」「海軍中攻隊」「第一御橋隊」「第二御橋隊」の碑がある。海軍関係の諸隊のことは次号で述べる。それらの碑の副碑に刻まれている文面も16号で紹介済みであるが、話の序に重ねて記述する。

「副碑に刻んである碑文」
昭和十九年六月米軍はサイパン島占領後十月には同島にB29を展開して、日本本土の爆撃を企画した。

これに対し我軍は十一月初より年末近く迄陸海軍の大型機が本島より発進して、十一回に亘り延べ七十三機が夜間爆撃を繰返したが、米軍側の対応措置強化に伴い我が方の損害急増し遂に三十四機が未帰還となり、これに伴う搭乗員の損耗も甚大となった。

唯この間十一月二十七日朝本島を発進して彩雲二機に誘導された零戦十二機がサイパン飛行場のB29に対し白昼銃撃を敢行し、米軍の心胆を寒からしめたが、これ則ち第一御橋特別攻撃隊である。

斯る戦勢に鑑み米軍は速やかに硫黄島を奪取する必要に迫られ、昭和二十年2月大挙攻陥軍を編成して侵攻したためである。これに対し我が方は第二御橋特別攻撃隊が大戦果を挙げる一

方、島上に於ては月余に亘り約七万の彼我攻防軍が過酷な戦闘を続けたが、当時大本営宛報告電の一節に「本戦闘の特色は、敵は地上に在りて、友軍は地下に在り」と、誠に戦闘の様相を表している。

今この山頂に立ち四個の碑石を眺め更に俯瞰して道標を辿り当時の戦闘を偲ぶ時、その由来を判然と識ると共に、雲霧千里海陽沈む情景に思いを馳せ湧沓合掌する次第である。

硫黄島



侵攻直前米軍の撮った写真

特攻隊員の心

田中 和子

(昭和39年生れの会員)

最近、心に残った一人の特攻隊員の遺書がある。

「お母さん、許して。私は家の人々の嘆きを考える。けれども、お母さんの子が今一度戦場に出て、そこに敵撃滅の大きな鍵を私の小さな命で贖えることを知った時、私はやっぱりお母さんの子としてよりも祖国日本の子供としての自分を顧みるようになったんです。でも、私はきっとお父さんの子でありお母さんの子供だったことを叫んで死んで行けることと思います。」

この遺書は、江田島町教育委員会委員長岡村清三氏の講演中、東大の一学生として紹介されたもので、私はそれを皇学館大學講演叢書第八十輯『戦没学徒の心』を読んで最近知り得た。「私はやっぱりお母さんの子としてよりも祖国日本の子供として自分を顧みるようになったんです」と、さらりと書かれている。この真情は、特攻で散っていった若者たちに共通の尊い思いであったと思うのだが、現在それはあまり語られない。「国のため」とい

うことがタブー視されているこの国で、もしこの人物が主人公となる映画を作られるとしたら、先部分はばっさりと削

除され、「私はきっとお父さんの子で死んで行けることと思います」の部分でクローズアップされるであろう。そして「天皇陛下万歳」などは誰も言わなかったのだ、という主張を映像に濃厚に漂わせる演出が必ずなされるに違いないのである。

■死者との対話

私は昭和三十九年生まれである。高校時代までは、太平洋戦争が実は大東亜戦争であったということすら知らず、特攻隊のことなどほとんど考えたこともなかった。その私が、とりわけ戦没学徒について関心を持ち始めたのは、大学一年の時にある本を通して、彼らが遺した和歌を読んだのがきっかけであった。その中に次のような一首があった。

吾死なば後につぎきてとこしへに
御国護れよ四方の人々

(和多山儀平)

「御国護れよ四方の人々」の結句が

胸に響いた。この人が死にあたって最後に望んだことは「祖国を守りぬいてほしい」ということであったという驚き。その願いを託した「四方の人々」の中には、この私も含まれているのだという発見。この死をかけた願いに応えていくことは、私達の責務であると感じたのである。

それから約十年を経て、学徒出陣五十周年の年を迎えた。細川首相の「侵略」発言がその年の八月に行われて政治家の浅薄な歴史観がみるみる明らかになっていった。死をかけて願いを託した後生が、心に何の痛みも感じずに、うす笑いさえ浮かべて己れを断罪しようとしているのを見て、死者の憤りと慟哭はいかばかりであるか。私は、死者の心を思ってたまらなかつた。

これは信じてもらえないかもしれないが、その頃のある日、私は特攻隊の映画を見て、晩には彼らの心 pensando 寝つかれないほどだった。すると、暗い部屋に寝ていた私の耳元でどこからともなく大勢の、幾万といつていいほどの人々の足音が押し寄せるように聞こえてきて、枕元に掲げてあった靖國カレンダーが青い閃光を何度か放ったのである。私は霊的な感覚は鋭い方では全くなく、この他にこのような体験

をもったことは全くない。英霊が私に何かを訴えたのだ、と今でも私は信じている。

その翌年から、私は戦没者学徒についての取材を始め、「散華のこころ——戦没学徒・生徒の断章」を『祖国と青年』誌上に連載するようになった。一回につきお一人の戦没学徒をとりあげたのだが、執筆の方針としてはその人の死生観を中心に、育ちや人柄なども出来る限り偲べるものにしたと考えた。だから、その人に関して手に入れることの出来た資料すべてに目を通すことは勿論、ご遺族・戦友には必ずお会いしてお話をお聞きした。

生者が死者のことを語るときには謙虚にならなければならぬ。死者は黙して居るから、時として生者は増上慢に陥りやすい。人ひとりが命をかけた——その行為の中に籠もる心情を、死を決していない者が云々することなど本当は出来ないはずなのだ。その出来ないはずのことに、ぎりぎりまで迫るのだという覚悟なしには、生者は死者を語るべきでないと思う。特に私のような戦争を知らない世代が、戦時を生きた人たちのことを語る時には、そうである。

しかし、そのことを知らない人たちが多すぎる。若者だけでない、戦争体

験者の中にも今の時勢に迎合して、彼らを一犠牲者としてのみ語る人がいる。若くして散っていった彼らの生は確かにかない。しかし、それは一時の為政者や教育によって騙されて、侵略戦争に駆り出され、無為に死んだ」という「犠牲者」としての惨めなかなしさとは違う。彼らはもっと賢明で、もっと自発的で、もっと朗らかだった。国の危急には身をもって殉じるといふ若人の純粹さを、最も純粹に生ききよとした彼らが辿りついた境地は高く、平和を貪っている現代人には遠く及ぶところではない。「犠牲者」としての暗い翳りを彼らに付与するのは、死者を冒瀆するものであると私は思う。

■「敵」と「祖国」の喪失

「ザ・ウインズ・オブ・ゴッド」という特攻隊員を描いた劇が昨年国連で上演されて好評を博した。それを企画・主演した今井雅之氏は昭和三十六年生まれ、「特攻隊と戦後の僕ら」という著書もある。特攻隊の若者の人間味あふれる純粹な生を描いたという意味で評価が高く、私も共感するところが多かった。今井氏のこのテーマに取り組む姿勢も誠実なもので、特攻隊が戦後世代によって語りはじめられたこと

は喜ぶべきことだと思ふ。

しかし、今井氏の言うところを読んでみて、強く感じるものがあつた。それは、大東亜戦争を世界的観点から論じることの出来ない視野の狭さ、そして国際社会を今も冷徹に貫く弱肉強食の論理についての認識の甘さ、である。特攻隊員たちが突っ込んでいった「敵」は何であつたのか、その視点なしに、彼らの心情に真実迫ることは出来ないのではないか。

「大東亜戦争Ⅱ侵略戦争」という図式は自明の前提として今井氏の中にあつて、今井氏にとって「戦争はくだらないもの」ではないという。しかし、大東亜戦争が米國から仕掛けられた戦争であつたことは、近年刊行されたエドワード・ミラー著『オレンジ計画』でも明らかにされているところであり、そもそも開戦の詔書に「米英兩國ハ……東亞ノ禍乱ヲ助長シ、平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス。剩レ与國ヲ誘ヒ、帝國ノ周辺ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ、更ニ帝國ノ平和の通商ニ有ラユル妨害ヲ与ヘ、遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ、帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ。……東亞安定ニ関スル帝國積年ノ努力ハ、悉ク水泡ニ帰シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ。……帝國ハ今ヤ自存自衛ノ為、亟

然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スル外ナキナリ」……「速ニ禍根ヲ芽除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ、以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス」と書かれていた。

開戦の詔書など、現今の人々は振り向きもない。しかし、戦没学徒の取材を続ける中で、私はこの詔書が当時の人々の中にどれだけ重い地位を占めていたかを知った。詔書に示された大東亜戦争の意義は紛れもない日本の国家意志であり、この詔書の精神を奉じて同盟二百三十万余は散っていったのである。この祖国の国家意志に信を置けるか否か、ということも特攻隊を語る上で、大きな岐れめになるところである。つまり、祖国日本に信をおけるか否か、ということである。

「大東亜戦争は侵略戦争だった」と言い放つ今井氏にも特攻隊の「人間性」にある程度迫ることは出来る。それによって人を感動させることも出来る。しかし、「敵」を見失い、「祖国日本への信」を失ったところで、特攻隊をいくら語っても限界があると私は思う。戦後世代が特攻隊を語り継いでいく上で、心しなければならぬことであると思つている。

■遺言の保存を

私は、特攻隊で散っていった若者たちが皆「天皇陛下万歳」と言つて亡くなつたとは言わない。しかし、そう言つて亡くなつた人々たちも随分いたと思う。「天皇陛下万歳」とは、「祖国よ永遠なれ」という祈りではないだろうか。その万感の思いを込めてこの一言を唱えた人々を私は尊いと思ふ。

「今一度戦場に出て、そこに敵撃滅の大きな鍵を私の小さな命で贖える。ことを知った時、私はやっぱりお母さんの子としてよりも祖国日本の子供としての自分を顧みるようになったんです」——この特攻隊員の心を後世に濁りなく伝えるために、なすべきことは多い。が、中でも特攻隊員の遺書の保存（出来れば現物そのもの）は重要である。遺稿集などに編纂されると編集者の恣意的な削除を被つたり、あるいは紙数の関係などで行間を縮められたり、または誤植があつたりして完全な形を残すことが少ない。写真での遺稿集など出来ないものであろうか。特攻隊の心を語り継いでいきたいと願っている若輩として、僭越ながら最後に提言申し上げたい。

知覧高女なでしこ会編

「知覧特攻基地」より(二)

25号に続きこの書物の「女子勤勞奉仕隊員の記録」という章から転載する。前号は(三年生一五歳特別攻撃隊担当)前田笙子の特攻日記とある部分を全部掲載した。今回はその続き、従って同人の記事である。

感想

大櫃中尉

常に黙々として威厳があり口髭を生やして二十七歳の隊長さん。私達には敵襲の時も「早く壕へ行くんだよ、強い真似をしてゐては駄目だ」と。御自分では部下を退避させた後は、一人ちつと大空を睨んで「カンシ(監視)」を怠らなかつた隊長さんだった。

宮崎少尉

学醫で少し学生風な方だったが、私達には女性としての自分を教へて下さるし、又学問もおひまなときはしてくださつたし、部下の方には副隊長として大へん優しい方だった。

横田少尉

黙々としたお方だったが、私達に会ふとすぐに微笑されて御自慢のチヨビ髭をなでているらっしゃった。出撃前、戦友の手できれいにチヨビ髭をそつておられた。

横尾伍長

伍長の方とはあまり親しくしてゐなかつた為、よく知らなかつた。しかし度々見てゐたのに、穴沢少尉さんにお顔が似てゐたのはびっくりしなかつた。出撃日、今井さん、横尾さんの擬装を取つて上げたとき「河崎のことしつかりたのんだよ。気の弱い男だからな」とにっこりされた。

河崎伍長

三回目の出撃までは元気で居られたが、四回目出撃を控へて病氣になられた。かねてから体が弱く、黄だんと聞いてびっくりした。そして最後まで居残られ、いろいろ看病の場句よくなされたが、まだ血圧が高いため征かれぬとのこと。福岡へ行かれて一人先に帰つていらつしやる。渡井、堀井、渡辺さんの伝言を伝へて下さる。

私達が行かなくなつてからも度々お会ひしてお話をおき、する。

福家長兵

私達を何時も戦闘指揮所まで迎へにきてゐて下さつたし、又帰るときも同じくお見送りして下さい。妹さんのお話を何時もおき、して泣かされてゐた。待避するときも何時だつて私達を連れて逃げて下さつたし、私が洗濯場でグラマンに襲はれたときも、待避々々と叫んで下さつて、すぐ隊長さんへ報告なさつた。十九歳の優しいお兄様だった。

岩間兵長

何時もしつかりして十九歳とも思へぬ軍人らしい方だった。しつかりとした中にも無邪気さがあり、おさるさん見たいに木のちよっぺん(てっぺん)へのぼられて木の上に寝られたり、皆んなで話してゐる所をかきまぜて笑はせたり、朗らかな方だった。

後藤兵長

同じ十九歳のお方で、始めの中はよく無邪気に話していらつしやつたが、一度出撃しそこねてから口をきかれず、何時も口惜しさうな顔をしていらつしやつた。出撃しそこねた日、私達と同じ位の高さなので、航空服姿の後藤さん、ちよこちよこして桃太郎さんみたいだと言つてゐた。

池田兵長

父親がなく淋しい方だった。徳之島まで一人で行かれて再び知覧へかへていらつしやつた。

四月十五日、隊長様残して出撃(徳之島より)体当り。

今井兵長

一番年若く十八歳の無邪気な方だった。

私達より二つしか違わぬお兄様、恥づかしくして一人ではあまりお話しなさらず。然し福家長兵様と仲がよく度々お話しする。出撃当日。擬装をとつて上げる。「こんなにお手々きたなくなるよ」と言はれたけれど無理にお願いする。若くして純心な今井兵長様、四月十五日を最後として散つて行かれた。御両親の心如何ばかりかと思ふ。

佐々木兵長

何時もこつけない十九歳の若いお兄様。

思ひ出のうたは、明日はお立ちか? 何時も何時もしばぶえにてうたつていらつしやつたあのうた。

形見の品

池田少尉(石けん、トランプ)

本島少尉(マフラー、万年筆、鏡、写真、名札)

福家長兵(万年筆)

今井兵長(名札)

岡安少尉(階級章)

岩間兵長（書置）

手紙

先日のお便り有難うござります。初めてお便り致します。

私は、岡安明少尉様最後の基地、○
○出発の際奉仕に参って居りました。

○高女です。岡安少尉様の出発の日



形見の品（知覚記念館）

まで五、六日間お世話して上げました。無口なお方でしたけれども、何時も朗かにたのしく私達には接して下さいました。そして出撃の前日、故郷のお友達の方へ最後のお便りをかゝれて私に出してくれとお頼みになったのです。こゝ最後の基地では兵舎宛ては出されぬから貴方の家の宛て出さう、とおっしゃって私宅の姓をかりてかゝれたわけです。そちらへお便りのついた頃は見事敵艦を轟沈させて安らかにお眠りになっていらした頃です。

四月十二日、第二次総攻撃参加でした。その日は朝早く飛行場の整備に出て行かれましたが、只「行ってくよ、いろいろお世話になったね、お元気で」と何気なくおっしゃったので「ほんと出発ですか」とお尋ねすると、「うん、午后からだけど飛行機のところまで行ってくるよ、さやうなら」とおっしゃって誘導路の方へ行かれたのですが、それっきり兵舎の方へはいらっしゃらずにお発ちになりました。

隊長様以下他の方は兵舎でお別れをなさって、私達と一しょに自動車で誘導路を「空から轟沈」のうたをうたって飛行機のところまで行ったのでしたが、岡安様の飛行機は外の誘導路へ置いてあったのでせう。見当たりません

でした。私達も二度と会へなかつたと思ふと口惜しくて口惜しくなりませんでした。飛行機の「擬装」もとって上げられず又、桜やレンゲの花も差上げられず残念でした。自分の飛行機が故障で出発できないのを無理に手早く、御自分で整備をされて出撃なさったのでせう。

午後十六時、隊長以下九七戦は最後の基地を飛び立ったのです。隊長機と思ふ間もなくすぐ後に岡安機は飛び去って行きました。私達が打振る手に答へて翼をふって飛び去る飛行機、かうして○機は速き南を指して飛び去って行ったのです。黒き一点となるまで基地は万載々と旗、桜花、マフラ一で一杯でした。

お別れの晩、九時まで私達に給仕をしてくれとお願ひされてゐたのです。かねては六時半までですが、隊長様が「最後だからどうか」とおねがひされて、先生の許しを得てゐたのです。皆酒に酔って、岡安様も私に無理に「空から轟沈」のうたをうたへとおっしゃって、お友達や岡安様、隊長様、本島様方とうたったのです。皆住所を承ったのですが、岡安様はすぐ明けの日早く出られたきりでしたので、住所をお伺ひすることができません。六十九振武隊でも岡安様の住所だ

けがわからずに困ってをりました。他の方は全部お伺ひして出撃なさったお方の家には皆お知らせができたのでしたが、岡安様だけはお父様のお便りで住所を知り今となつたやうなわけです。悪しからずお許し下さい。早くお知らせしなくてはと思ひながら住所がわからずにはどうすることも出来ませんでした。

岡安少尉様は笑って出撃なさいました。御安心なさって下さいませ。その日の戦果も大へん挙って居ります。此の中に岡安機が体当りした敵艦があるのだと思ふとき、私達かゝりの者はうれしいやら悲しいやらです。

四月十二日が岡安様の御命日です。十六時頃出撃されましたから、十八時半には見事敵艦に体当りをなさっていらつしやる筈です。

それから、私に百三十五円、軍刀を買ったお金を三重県伊勢山田市に送ってくれとお願ひされたのです。為替に送ったのですが届いたことではせうか。もし届かぬ様なことがありましたら受合つた私の責任ですからお知らせ願ひます。送ってしまったから宛名を書いたものをどこかへ落としてしまいましたので、こちらよりその店へお尋ねするわけにも行きません。

お父様を知っていらつしたならす

くお手紙でとゞいたかどうかをお聞き
出来ないものでせうか。お願ひしま
す。知覧郵便局より送ったのです。百
三十五円でした。

死ぬまで借金してゐたと他の戦友を
笑はせていらっしやいました。

先づはお知らせお願ひまで。お体大
切に。

埼玉県南埼玉郡江面村太田袋

岡安佐太郎様

鹿児島県川辺郡知覧町中郡三七八

前田笙子

(注)岡安明様のお父様に宛てた手紙
で、昭和二〇年六月一四日の消印があ
る。手紙類を含め郵便物は軍の検閲が
きびしかったので、知覧高女の生徒が
こっそりと歸りに特攻隊員より預り、
地元郵便局から出してゐた。それ
も、時には発信地、発信人を高女の生
徒の自宅にしたこともある。岡安明様
の手紙か遺品が届いて、もしやと思つ
て前田宅へ問い合わせがあり、四月一
二日に出發戦死したことを初めてお知
らせした。

*

初めてお便り致します。さぞ不思議
に思ひなさいませう。私(高女)は
高女で池田隊長様におたのみされて
お便り書く次第です。

最後の基地〇〇に奉仕に参りまして

池田隊長さん御出發の際まで六日間、
一緒にゐました。出發前日、私に「故
郷へ第二次総攻撃参加、元氣に出發し
たと書いてくれ」とおっしやいまし
た。温順でやさしい隊長さんでした。
私達と一緒に慰問の舞踏を見たこと
かへり、甘藍を見て「この甘藍はもう
じききれいにたまになるだらう」と
おっしやいましたか、その甘藍も今で
はきれいに巻いてをります。そして一
緒に無邪気に「空から轟沈」のうたを
声高らかにうたはれました。部下の
方々も大へんおしたひして一緒に行け
なかつた方は男位きに泣かれました。
初めていうっしやった時など、此んな
お若い方が隊長さんだらうかとうたが
ふ位でした。一日々々となつて行く中
に隊長さんの立派さを知り、私達も隊
長さん隊長さんとなつてをりまし
た。

部下の方々もみんな一年は若いがお
となしく無口で頭の一番いゝ立派な隊
長だったんだよ」と隊長さんのなくな
られたことを惜しんでをられました。

部下にもやさしい隊長さん、そして私
達にとつても親切で、出發のときレン
ゲの花の首飾りを作って差上げると大
へんよろこばれ、又私達の手で隊長機
の機装を取上げてると「有難う」と
何回もお礼を言はれ、そして「飛行場

までこの始動車に乗って行きなさい”
と最後に自動車までお世話して下さい
ました。それから私達が兵舎まで桜の
花を取りに行つてかけつけた時はもう
遠い出發線に並んでをられました。桜
の花を差上げることの出来なかつたこ
とが残念でたまりませ
ん。大きな鉢巻にくっ
きりと塗られた日の
丸、そしてレンゲの花
に囲まれて征かれた隊
長さんの顔が鮮やかに
目の前に浮かびます。
四月十二日、第二次
総攻撃参加。
鹿児島県原部初倉村坂
本一三五二一三
池田熊平様
鹿児島県川辺郡知覧町
中郡三七八 前田笙子
(注)池田亭様のお父
様に宛てた手紙。昭和
二〇年四月二二日付
り)

知覧高等女学校三年
一五歳 戦隊担当

鳥浜 礼子

感想

昭和二十年三月二十七日

今日からは朝から霜出迄車をはこ
び、いもとりに行く日であった。自分
は作業服を着けて行かんばかりであつ



た。そこへ学校からの電話があり、制服を着て学校へ来いと電話であった。

前田さんも家へ来てゐた。先生が名前を言った人達だけ二十名位、学校へ集まっていた。先生のお話で「特攻隊へ慰問へ行くのであった。自分達は今日一日かと思ひ行つたのである。自動車が来るはづのが今日は出られぬとの事である。役場の山口（知覧町役場学務課長）さんを先頭に先生、生徒、その頃は海軍の特攻隊がよく新聞には出てゐたが、自分達は特攻隊といつても見た事もなかった。新聞にもくはしく出て居たが、まさか体と一緒に死に、に行くのではないだろうと思つた。行つて見ると事実である。同じ人でありながら愛機と共に体当りするのであつた。飛行場だろうと思つて居たがさうでなかつた。飛行場のまはりを通つて行くのである。「まさか、先生達が飛行場へ行く道をまちがへて居るのではないだろうか」と思ふ様な見知らぬ道を歩かされた。今迄飛行場へ行くのは禁止されていたので約一年位来て見なかつた。飛行場がとてとても広く、又新しい道路が山の方へ多く出来て居た。

練習機と違ふ一人乗りの小さな古びた飛行機が山の方に何機と居た。その

飛行場には、米機が見てもわからぬ様に擬装してある。あちらでもこちらでも整備兵が走りまはり特攻機を整備して居る。

何処の飛行場から来たのであろうか。何十機といふ飛行機が着陸して居る。自分達はその中を兵舎へ兵舎へと向つて居る。もう二十七日の頃は警戒警報は毎日出て居たのである。自分達が飛行場の通りをはいらうとする時、知覧のサイレンがなりだした。しばらくして飛行場の鐘が警戒警報を知らせた。

前略

礼子さん度々無理なるお願ひお許し下さい。さぞ御迷惑の事と存じます。御礼をと思ひますが今の自分にはそれ出来ず残念です。失礼ですが晝面に厚く御礼申し上げます。

知覧の出来事は自分の短い一生です。楽しい思い出となります。礼子さんの贈物は自分の最後を見とどけて呉れると思ひます。飛行機に乗って行くのは一人ですが、自分の心には真心を乗せて征きます。薩摩の乙女達の毎日の奉仕を受けながら散る自分たちは幸福者かも知れませんが、今の自分には家の事も親兄弟の事もなく、唯敵撃滅の燃るやうな心のみです。

礼子さんのお手紙に依り銃後の事は安心です。戦をする者にとつて銃後の事情に掛る事はないと思ひます。自分も安心して死ねます。

いざ征かん愛機と共に散華までこれは自分達の心をよく表してゐると思ひます。先輩の同期生が次々散華し、自分達ばかりが残ると言ふ事は心苦しい事です。此の心は分つて戴けると思ひます。だが決して死を早まらんつもりです。任務を完遂する迄は断じてやりませ故御安心下さい。最後に礼子さんの将来の幸福と御健康をお祈りすると共に無理なお願ひお許し下さい。

礼子様

（注：西庄三郎は飛行第六五戦隊、昭和二〇年五月四日午前六時出撃戦死）
お父様お母様へお願ひされた送り物を郵便局へおとゞけしたお礼に。

お父さんお母さんの思ひの方で、死の真際まで何時も送りものをなされて居られた。

*

激励の御言葉自分の心に深く秘め必ず頑張ります。敵を攻撃するまでは途中にて絶対に事故等を起さぬ覚悟です。

屹度々々頑張ります。

戦争は自分達で勝つて見せます。戦いの事は心配せず銃後の務を完うして下さい。

みなさんの贈物「マスコット」として自分の征く所必ずつれて行きます。「マスコット」は必ず自分を守つてくれると思ひます。部隊に來なくなつてもどうかお便りを下さい。自分を忘れずに居て下さい。終りにみなさんの健康と幸福をお祈り致します。

（注：西庄三郎は同前）

三郎様



特攻隊員が起居した三角兵舎跡の碑と生き残つた神坂次郎氏が建てた灯籠

知覧特攻基地戦没者慰霊祭

昨年は8月15日であったが今年は何年の通り5月3日特攻平和観音堂前にて厳粛盛大に執り行われた。

ご遺族も全国より200名近くお見えになり、全参列者は千二百名を越す盛況であった。今年には根上淳氏(特操2期)とペギー葉山ご夫妻がお参り下さり、特操会の前夜祭は大変盛大であった。

東知覧町長(知覧特攻慰霊顕彰会長)、県議会代表等が続いて、借行社代表57期細居俊司氏より慰霊の言葉が捧げられ、参列者は更めて強い感銘を受けた。

慰霊の辞(要旨)

祖国日本は累卵の危機に立ち至りました。この時皆様は、この現状を黙過することが出来ず、愛する日本を護り同胞を救わんと、決然として特攻への道を選ばれたのであります。

さきかけて 又さきかけて 死出の山

まよいはずまし ますらおの道 何という純粋な神々しいまでの若武者の姿でありましょうか。しかし生死を超越されたとはいえ、皆様も人の子、三角兵舎での日々故郷におられる年老いたご両親、最愛の奥様やお子様

また愛しい弟や妹たちへの断ち難い恩愛の情にどんなにかつ

らい思いをされたことでしょうか。

故郷に散るとも知らず 我を待つ

老いたる母に 如何に告げなん

昭和20年8月御聖断により終戦となつて、早や51年の年月が経ちました。皆様のご加護のお陰で日本は見事に復興し世界で最も平和で豊かな国となりました。長い間欧米諸国の植民地としてその支配下にあつた諸民族は終

戦と共に次々と独立を果たし、特にアジア諸国の発展は目覚ましく21世紀はアジアの時代とまで言はれております。これら諸国の指導者や人々の中に敢然戦つた日本、そして皆様の中にもつて示された威私奉公の姿に深い感

動と尊敬、暖かい友情と協力を期待し 国創りに励んでおります。しかしこの様な明るい反面、日本の現状を見ると 将来に一抹の不安を感じます。混迷の続く政界やバブル経済の崩壊による不況は金融界にまで及び、社会を不安

に陥れる諸種の出来事や、いじめに對策なき教育界寒心に耐えません。又今日の日本を支えている人達の中に 国や社会を考えない個人主義や利己主義が はびこり限りなき欲望を満たそうとする風潮が見られ心荒廃を感じます。

国を愛し人を愛し、礼儀や信義道徳を重んじ一旦緩急あれば義勇公に奉ずる等二千年培ってきた日本人の誇りや心は一体どこへいつてしまったのか。昭和の歴史を共に生きて来た私たちは此れからの日本を背負う人達に、若くして自らの命を捧げて今日の平和の礎となられた皆様至高至純の崇高な御心とその勳を歴史の真実としてしっかりと語り伝え日本人の心を継承することをお誓い申し上げて慰霊の言葉と致します。

殉国沖繩学徒顕彰

五十一年祭

毎年6月23日(沖繩慰霊の日)に、靖國神社で殉国沖繩学徒顕彰会が主催しているこの顕彰祭については、昨年の24号でも紹介したので、重複を避け感銘深いことだけを述べる。

毎年のことながら祭文を奏上するのは大学生である。今回は日本大学二年生宮崎光治氏だった。その一節に言う、ごうした先輩方の命を賭した勳

の上に今日のわが国の平和と繁栄があることを思う時、私共は諸先輩方への感謝の念と日本国民としての誇を新に致します。翻つて戦後五十年を経た今日、なお歴史を断罪し、戦前戦中の歴史を汚れたものとして宣伝することが良いことであるという風潮があります。これは慰霊の心とはほど遠いものであり、先輩方を断罪することによって自己満足をはかる最も卑劣な振舞であります。

祭文奏上に続いて奉納吟があった。

その中の和歌一首、

悲しさのあまり井戸までかけたれど

水汲みし子の 足あともなく

―ひめゆり部隊に二人の娘を捧げた母の歌―

この会の主宰者は国士館大学の金城和彦教授で、我が協会の顧問である。



特操2 根上 淳 ペギー葉山夫婦

興亜観音例祭行はる

五月十八日
熱海市伊豆山

興亜観音の境内に昭和殉難者の碑が建てられていることは、この会報24号（平成7年8月）で既に紹介済みであるが、本年の例祭に因んで若干説明し度いと思う。

抑々興亜観音は、日支事変の初期中支那方面軍司令官だった松井石根大將が、日支両軍の戦死者を弔う為、昭和15年に建立されたものである。戦後松井大將は巣鴨の拘留所に入られる際に伊丹忍礼師に堂守を托された。

松井大將ら七士は昭和23年10月23日に戦勝国の報復裁判で処刑された。東京裁判の三文字弁護士らは、横浜の久保山火葬場から残骨を骨壺一杯ほどを盗み出し、伊丹忍礼師に托したのである。後に愛知県の大塚根山に分骨されたが、興亜観音では昭和34年に「七士之碑」が建立され、殉難七士をお祀りしている。また忍礼師はその後東京裁判以外の殉難者一〇六八柱もお祀りすることにし、その碑も建立された。更に「大東亜戦争戦没将士英霊菩提」の碑も並んで建立されている。毎年行は

れる例祭は、それらを併せた法要である。

伊丹忍礼師と夫人妙真尼は既に亡く、妙徳、妙珠、妙浄の三姉妹が両親の御遺志を継ぎ、堂守りと日々の御供養を続けておられる。

興亜観音はバス道から急な山路を三〇分ばかり登った処にあり、交通は不便であるが、汗を流して上り参詣することに意義がある。



4月25日に行はれた
英霊にこたえる会の総会に因んで

靖國神社参拝の要請を、あえて中止させたのは三木内閣であります。

英霊にこたえる会は、靖國神社公式参拝を実現する為、昭和51年に創設された団体で、15万の会員、28の中央参加団体、47の都道府県本部を擁している。当面の最大目標としては、8月15日の「戦没者を追悼し平和を祈念する日」に首相の靖國神社公式参拝を求めて、国民運動を展開している。

我が特攻協会としても、その理念に於いて聊かも異なることはない。

此の度の総会で井本台吉会長（元検事総長）の逝去に伴い、堀江正夫氏（郷友連会長・元参議院議員）が会長に就任された。

堀江会長の挨拶より

本会が悲願とする靖國神社への総理大臣の公式参拝は、昭和60年8月15日に中曽根総理の参拝以降中断していることは御承知の通りであります。戦後吉田総理から田中総理に至る歴代の総理は、当然のこととして公式参拝をされております。

国公賓の表敬参拝については、昭和36年12月のアルゼンチン大統領と同48年9月のトンガ国王皇太子のお二方を教えるのみであります。ときに昭和50年5月訪日されたエリザベス英国女王

自衛隊の部隊参拝については、藤原岩市氏が陸上自衛隊第一師団長当時の昭和40年7月16日、六三三名による正式の部隊参拝を一度だけ行ったに止まっているのであります。これらのことを回顧するとき、我が国の靖國神社をめぐる歯車は正に常軌を逸して狂っていると思はざるを得ませんが、それでは何故このようになってしまったのでせうか。それは偏に自虐史観から脱却し得ない誤った政治姿勢にあると思ふのは私一人ではありません。

過日クリントン米大統領が訪日され日米安全保障条約の見直しという画期的な歴史に残る機会が交され、国会における演説で我が国の防衛のみにとどまらず、アジア、太平洋の安全を基盤とした新しい体制が強調されました。ところで、議場に居並ぶ国会議員は、果して何人の者がその防衛の第一線に携わるのが誰であり、かつてその任に携り、国に殉じられた方々が誰であったかに思いを巡らしたことでありましょうか。思うにクリントン大統領が今回靖國神社に参拝されたら、安保体制は名実共に筋の通ったものになったでありましょう。

人間魚雷「回天」特攻隊員の

出撃日記

編者 河崎 春美



佐野元一 飛曹

出撃口誌は光基地から玄作戦多聞隊の一艦伊三六六号潜水艦により出撃した20年8月1日からパラオ諸島北方海域で米輸送船団に突入の8月11日間で、回顧も含めノートに書き残したもので、整備員の手で遺族に渡され、遺族から大津島記念館に収められた。

出撃口誌

回天特別攻撃隊 多聞隊 時岡隊

飛曹 佐野 元

回天特別攻撃隊

多聞隊 時岡隊 出撃

先任搭乗員

中尉 成瀬 謙治 一 号艇

次席

少尉 鈴木大三郎 五号艇

下士官

一飛曹 岩井 忠重 三号艇

二飛曹 佐野 元 二号艇

三飛曹 上西 徳英 四号艇

昭和二十年八月一日

総員起しにて起床、光の空気は静かだった。身の回り整理をする。

饅頭朝食を卵焼と鯛にて戴く。下士官搭乗員全員元氣旺盛、意氣衝天にて、〇七〇〇軍艦旗掲揚、天気愈々快晴、肅然たる中に軍艦旗は光突撃隊の庁舎の上高く翻る。

何時もに比して気持ちよし、終りて司令の身に余る激励の御言葉を受け、搭乗員一同責務の重大なるを痛感、聴て神に参拝、七生報国の鉢巻を締めて頂き、七生報国の決意も固く、心中血湧き肉躍る心地。連合艦隊司令長官よりの短刀を戴く持に殊勝に感極まる、心冷静にして何の思う所もなく、一途に皇国の安泰を祈る。

記念撮影も勇氣百倍なる所を写す。

別室も六艦隊長官と共に静粛に交わさる。

胸に温みを感じず。次に花束を戴き、基地隊総員に別れを告げる。搭乗員分隊、士氣極めて旺盛。懐しき一分隊員と訣別、花もちぎれん許りに振り廻す。潜水艦乗艦、第六艦隊長官よりの挨拶あり、潜水艦乗員も全て必殺の鉢巻を締む、戦意絶大なりと言うべし。

海上、見送りにて実に壯観を呈す。予、回天の上に在りて花を振りつつ感極まる。

まもなく出港、帆足、新村、近見、松浦、中島、久保、小林、外一分隊員の叫び声も薄れ、潜水艦と見送りの船とは次第に離れたり。

もう未練はない。皆に送られて光を後にした。後は帆足に頼んだ。これからは清く死ぬまでに精進あるのみ。故郷で、将亦光で鍛えし腕を発揮するの

だ。切齒扼腕の思いす。

乗員と語らう。田村さんよりの贈物を開いて見る、又感あり。

一時間ほどして祝島東端に達す。回天に乗り六倍にて光付近を見る。峨嵋山、懐かしの峨嵋山がほのかに見ゆ。愈々さらばだと決意は固まる。

基地隊よりの贈物の美羹を潜水艦上にて空を眺めつつ食べる。また一趣、二趣あり。

これからこそ、眞の生活なり。男と男の生活、凡てを投げ出した清き武人の生活、これが何処で求められよう、これでこそ眞に戦果を得、神州の曙を迎へ得るなり。

〇九〇〇出港後、約一〇時間にして豊後水道沖島を真横に見る。暗雲立ち込め波浪亦高し、潜水艦は大きくゆれつつ進む。波をかぶる持に勇壮なり、実に黒龍波を噛んで進むの感す。

誰か知らんこの壮拳、今針路一六六度直候にて豊後水道を出んとす。見よや吾が祖国之姿、之れ持に最後なるべし、神州之弥栄を祈る。

時に一八三〇

豊後水道を一路南進、沖繩ウルシ間の敵輸送路を制覇する任務重大なり、黒鯨五基を搭載せる大龍は潜航、少々動揺が静まり楽になる。

回天に搭乗発進訓練を行う。

現在の時刻二〇〇〇中央倉庫就寝中、上西も岩井も起きています。岩井は相変わらず人形を眺め本を読みあり、モーターの音、艦内通風筒より吹き出す風の音、一刻一刻、実に予にとつては重大なるものなり、潜水艦潜航中、信管長内海兵曹にトランプを借りて遊ぶ、二一〇〇就寝。

二十年八月二日

〇六〇〇起床、潜水艦浮上、〇六一〇司令塔に上る。艦長初め航海長、信号員、見張員等波をかぶって見張に凝たり。

既に太平洋に出て、波大なり。波高五米、ローリング、ピッチング大、起きてみると気分悪し。刻々会敵圏へと近付く、予、元氣愈々顕昂。夕飯上西、佐藤、更谷食はず、相当酔ったらしい。

回天深度二七米、特眼鏡より浸水少量あり、その他異常なし、潜航中蒸し暑く汗がでる。モーターにて水中三、四トリーにて航走す。トランプを出してうらないをやって見たり、歌を唱ったりする。

潜水艦ローリング、ピッチング大、波高き横傾なり、一六〇〇頃浮上、動揺愈々大となる。

一八〇〇潜航、発令所にて喫煙す。夜食、蜜柑、アイスクリーム。

八月三日 〇六三〇起床 朝食

寝台整理、狭い寝台の側板に飾られし、祖国の香りのする人形、何れも予の心を慰めてくれる。息苦しい様な中央倉庫も吾等の人形にて賑やかなり、乗員すべて汗と埃にまみれて敢闘、これぞ神州男子の真の面影なり、裸と裸の清き交わり、之こそ轟沈、之戦果全し。

魚雷浸水なく、只来るべき日を待つ。あるのみ。本艦初陣なれども張り切つた艦長の下約百名、乗組員渾然一体となりて

君が為 只一条の誠心に

当りて砕けむ 敵やはあるべきの意気にて一路南進する吾人の前途に、必ずや栄冠あり、実に百名の神の出陣と言ふべし。

九〇〇浮上、四囲感なし。艦橋に上る。波高六、七米、天童涛を嚙んで進み、艦尾怒涛蟠居す。向波なれども甲板整備支障なし、各艇其極めて良好、岩井と煙草を喫む。実に味よし。始めて太平洋の真只中に出でたる誇りを感じると共に海国日本男子の雄飛の血潮は躍る。水平線の辺りにむら雲あり已に夕方なり、一番星を見付け

る。航海長の天測が始まる、次第に星が現れ北極星、北斗七星等見える様になれり。

田村さんと約束。二二〇〇頃艦橋に上つて北極星北斗七星を眺める。故郷で見た、亦光で見た趣と、異なる所大。

本艦の前途と会敵を祈るのみ。襲撃演習実施す。

八月四日 天候晴

〇五三〇起床、潜水艦浮上中、教練回天戦用意、艇長乗艇、発進用意まで。

乗艇、電話異状なし、整備員が実際の場合と間違ひ、起動弁を開く、起動弁より相当漏気あり。のち起動弁を取り出し衝帯を換装、漏気なし。

本日隊長より初めて褒めらる、訓練に訓練を重ね来りし義烈隊、前途に栄冠あれ。隊長と語り合ひトランプ、甚等して時間を過ごせり。

一六〇〇、浮上。回天縦舵機を 작동させてみる、異状なし。上甲板整備の結果、深度機、前部浮室浸水なし、極めて良好。

水色藍に空気又澄みて、日没近し。搭乗員艦橋にて昔を語る、実に二〇有余年の人生も想ひ出多し。

訓練に訓練重ね 我隊の戦果を見よや 四方の人々
八月五日 〇九〇〇 回天戦用意・魚雷戦用意
搭乗員、整備員意気衝天、敵機動部

隊に遭遇す。二〇年鍛えし吾が真髓を發揮せん時は来れり。

只、天皇陛下の万歳を叫ぶのみ、今こそ小学校の各恩師、中学校の各恩師、入隊以来の各教官に報恩の秋、胸に七生報国の決意固く頭に鞍馬の数珠をかけ、大君のため大君の為 只一条の誠心に 只に突入あるのみ。

(血書)

忠一 路
8月5日に記した血書

回天戦用意収め

敵 第三艦隊 距離四万 速力大 遂に大敵を逸す、搭乗員無念の歯がみをなす。

皆次の機を待つ。敵艦隊北上、潜望鏡観測不能。

多聞隊の歌

佐野 元

一 光を後に幾千里

あの感激をその艦に 潜水艦は南進す

ああ殉皇の多聞隊 敵を求めて今日も又

必死必中の訓練に
眼血走り口はさけ

三 搭乗、整備、回天は
完全無欠ぞ敵艦に

一身かけて体当り

四 滅敵の意気天を衝き
会敵圏に我はあり

忠に死するは明日なりや

五 今日か明日かと待ちつるに
我突入の時は来ぬ

一身忠に満ちたるか

二二二〇頃艦橋に上る、全周感なし、
暗雲星なし、潜水艦は怒濤を蹴って露

進ず、夜光虫が光る、黒い波、この波
は祖国まで、否、光迄続いている。戦

友よ！一分隊の諸兄よ！帆足よ刈田よ
見てくれ義烈隊の戦果を！

北極星を眺めて敬礼 ニッコリと
艦橋に上りて見れば 日の出かな

戦友と笑ってからだ ぬぐい合う

八月六日
朝食後艦橋に上る。東天明るみ太陽

將に出でんとす。これこそ神州の曙の
如き心地せり。水平線の遙か彼方を眺

めて、明日の会敵を祈る。本日出撃後
初めて体を洗う。戦友と垢のコツテリ

溜って居るのを苦笑しつつ拭い合う。

実にさっぱりとする。昼食後観測訓練
を行う、マッチ箱使用、成績良好。

夜間艦橋に上り隊長と隊員雑談を交
わす。

北極星が瞬く、高度二四度。
到頭北緯二四度に來たる。沖繩の東方

三〇〇哩とかや。
電報二二四五、敵水上艦艇東経二三

四度二〇分北緯二二度、針路一〇度と
言う。

愈々会敵圏内に迄入る。明日辺り会
敵の算大なり。北極星は幼き頃より眺

め、北斗七星と相俟って予に取って
は、天の監視者の如き感す。

我に天神地祇あり、父母兄弟あり、
只、断行あるのみ！北極星、北斗七星

共に予科練入隊より、幾度か眺め故郷
を偲び、亡き祖父又父母に奮闘を誓い

し事か。この度は南十字星を見ん、我
朽ちたる後も月星は太平洋上にきらめ

く事ならん。
八月七日

早朝訓練、潜航中回天発進並襲撃訓
練、回天異状なし。操空〇・五K/cut

増す。午前午後読書して過ぐす。昼食
後暫く隊長と雑談す。潜航中は汗ばん

で臭気を発す、浮上を誰しも待ち焦が
れるなり。夜食蜜豆なり、実に甘かり

八月八日 大詔奉戴日

〇九〇〇頃、回天発進訓練あり、的
異状なし。照明灯、特眼鏡目盛照明灯

に赤布を巻く、昼間読書、暮、隊長と
雑談等して過ぐす、暮もやっと判る様

になり面白い。
一七〇〇潜水艦浮上、感五、ただち

に潜航。
一九二〇浮上、艦首方向一三〇軒感

度あり、次第に消滅。敵小型哨戒機ら
しきもの一機飛行中。今潜航中、予定

配備点に懸吊。予母艦を離るる時は七
生報国の白鉢巻に、去る四年前中学在

学当時予を守られ度しと書きし清浄院
直法諦山実道居士のお守、大井氏神の

お守、鞍馬山・伏見稲荷のお守を胸
に、稲荷神社より戴きし手袋をなし、

必勝の信念に燃えて突入するなり。
予科練時代休暇にて帰省し、氏神様

にて軍刀を祈禱して戴きし時頂戴せる
神撰、米、かつをぶし、今此処にあ

り、予が戦闘に臨む時食べんと残せし
ものなり、敵艦轟沈を前に食べるの

だ。予の向う所必沈、予の突入する所
神州の曙あり。

父上様、母上様へ。
休暇の時は何も真実を語らず、只語

れるはうそのみ、何たる不孝ぞ。し
かし軍機上致し方なし、黙って決別

ん。わが生存中の我儘切にお詫び申
す。父母に先立つは長男として申し

訳なければども、大君の為なれば何の
父母であり、兄弟なるか。胸中に神

州の曙を画き、勇んで敵艦船と大和
魂との激突を試みん。実に爽快な

り。
八月九日 〇九〇〇頃、回天発進訓練

あり。
以後岩井、上西、安達等と暮の勝負

をやる、負けたり勝ったり時間の経つ
のも知らず、上西、岩井は寝台に横

臥つてグウグウ眠って居るなり。何か
楽しき夢をみている事ならん、昼食後

暫く読書、会敵を念じて就寝す。遂に
会敵せず。

一七〇〇浮上、特眼鏡異状なきやを
確認、異状なし。浮上の黄昏時は絶景

とも言ふべし、水平線の彼方に黒くも
くもくと出でたる雲、林の如く洋上な

れども大荒原を想い出す光景なり。
艦橋にのぼりて一服やる、波静まり

て内海の如し、襲撃に絶好、明日辺り
会敵の感がすると隊長隊員、ビール、

酒肴にて決別の盃を交す。ビールは電
信長より頂戴せしものにて、冷蔵庫に

て冷却し、実に良き風味ありゴキにな
れり。

整備員は皆グウグウ寝ている。チー
ゼル機関の音が喧しい。電報が次から

次へと入り暗号長は多忙なり。

扱て、遂にソ聯は対日宣戦布告を決したらしい、將に風雲急なり。帝国の壮士巖然と起つべし。

分隊長

前略 在隊中はご厚情を忝うし、殊に出撃に際しては懇切なるご薫陶を賜り、小生感激の至りに御座候。出撃後天佑神助により、回天兵器に異状無く、只会敵を待つのみ有之候。

分隊長の言われし最後の最後迄頑張り、男の初一念貫徹致す覚悟に御座候。

誓期成功。御省慮被遊度。

右在隊中の御礼芳々一筆認め申し候

敬具

八月九日 一飛曹 佐野 元 拜

分隊長殿

前略

大迫以来のご指導身に泌み小生をして今日あらしめた事は、三宅大尉の御懇篤と感謝のきわみに御座候。特に御懇切なる同乗指導、今更彷彿たるもの有之候。○四棧橋にて荒雨としてお送り下されし面影、何時迄も不忘、只、必勝と轟沈を誓ふのみに御座候。

黙ってお別れ申し候へ共、在隊中の御礼は敬空母・戦艦轟沈にて致す覚悟に御座候。

失礼とは存じ候へ共一筆相認め申し

候。

何とぞ御放念被下度

草々

八月九日

三宅大尉殿

一飛曹 佐野 元

前略

分隊士には大迫以来吾人の兄貴として、寒暑を厭わず熱烈なる御指導、感謝致し居り候。

来世に於ても決して忘れられざる分隊士にして、真に吾人の行動を知り、吾人を知りて指導下されしご配慮厚く御礼申し上げ候。

出撃後回天兵器異状なく、只、会敵を待つのみにて必ず轟沈して分隊士にお応えせん覚悟に有之候はば何卒御安心被下度、先づは一筆認め申上候。

八月八日

坪根分隊士殿

敬具

朗らかなる

八月十日

回天発進訓練終了後は殆ど終日寝て暮らせり。まったく昼か夜か分からぬ様な気がする。今日も会敵せず日が暮れる。艦橋に上る、海上昨日に変わらず静なり。潜水艦漂泊して上甲板整備を行ふ。各艇共きわめて良好、北緯十七度にて予定配備点迄後暫くなり。扱て流星は何うして北極星、北斗七星、

等と名前ある星には起こらざるもの

かと思議に思へり。

八月十一日

一七三〇敵発見 輸送船なり

我落着きて体当たりを敢行せん。

只、天皇陛下の万歳を叫んで突入あるのみ。

さらば、神州の曙よ来れ。

七生報国の白鉢を締め、祈るは轟沈

20・8・1 光基地出撃

多間隊 イ三六潜

8・11 米輸送団に成瀬中尉・

上西一飛曹

と共に突入 パラオ北方海域

(編者註) この日誌は20年8月1日光基地出撃より11日突入まで毎日書かれているが、3日の欄には「光基地における訓練回顧」題し次のように記入されている。恐らく過去の日記を抜粋したものである。

八月三日一〇〇

光基地に於ける訓練回顧

予が大迫基地より光に到着せしは昨年十一月十一日の昼なりき、光にて将に吾人が終生之訓練地なりと張り切り来りし所、されど未だその施設なくバラック建ての兵舎にて起臥せり。吾人は光の建設者なりの意気の下、開墾なり、防空壕掘りに大汗を惜しまず、日々塵埃にまみれたる努力の形跡なら

ざるはなし。暫くして光基地隊の隊員も増加し、軍隊らしき形態をなすに至る。

我ら下士官搭乗員〇〇名は、宮田大尉(分隊長)近江大尉・中島中尉の指揮下、良く本分に邁進、予、この間中島中尉の信頼最も深し、將にご恩に報ずべく真剣そのもの日々を続く。潜水艦実習も行われ、三日間イ三七〇潜水艦に乗り組む。艦長、砲術長(林慶治海軍中尉)等と懇切に交はる。三枝、森岡二飛曹の潜水艦との聯合訓練中なりき。光での辛苦も何のその、調整場が出来上がり、グリーンが整備され遂に光基地の開隊を見るに至る。

時に昭和十九年十二月一日

この日、潜水艦実習より帰隊す。此の日天気晴朗、勇ましく翻る軍艦旗、掃き清められし練兵場、浜辺に静かに打ち寄る波も喜々として叫ぶ如く、自分には全てが光基地の前途を、否、大日本帝国の前途を祝福して居る如き感あり。

本日、河合中尉の開隊初日の発射あり、良好に行き申し分なし。十二月一日の後は見字として追躡艇同乗、〇六回天機構の研究に日を重ね、追躡艇同乗は相当防寒具を纏うも寒身に泌む。

回天の航走して残す青い航跡と水の

光基地に於ける訓練回顧

予が大迫基地より光に到着せしは昨年十一月十一日の昼なりき、光にて将に吾人が終生之訓練地なりと張り切り来りし所、されど未だその施設なくバラック建ての兵舎にて起臥せり。吾人は光の建設者なりの意気の下、開墾なり、防空壕掘りに大汗を惜しまず、日々塵埃にまみれたる努力の形跡なら

ざるはなし。暫くして光基地隊の隊員も増加し、軍隊らしき形態をなすに至る。

我ら下士官搭乗員〇〇名は、宮田大尉(分隊長)近江大尉・中島中尉の指揮下、良く本分に邁進、予、この間中島中尉の信頼最も深し、將にご恩に報ずべく真剣そのもの日々を続く。潜水艦実習も行われ、三日間イ三七〇潜水艦に乗り組む。艦長、砲術長(林慶治海軍中尉)等と懇切に交はる。三枝、森岡二飛曹の潜水艦との聯合訓練中なりき。光での辛苦も何のその、調整場が出来上がり、グリーンが整備され遂に光基地の開隊を見るに至る。

時に昭和十九年十二月一日

この日、潜水艦実習より帰隊す。此の日天気晴朗、勇ましく翻る軍艦旗、掃き清められし練兵場、浜辺に静かに打ち寄る波も喜々として叫ぶ如く、自分には全てが光基地の前途を、否、大日本帝国の前途を祝福して居る如き感あり。

本日、河合中尉の開隊初日の発射あり、良好に行き申し分なし。十二月一日の後は見字として追躡艇同乗、〇六回天機構の研究に日を重ね、追躡艇同乗は相当防寒具を纏うも寒身に泌む。

回天の航走して残す青い航跡と水の



多聞隊イ366潜 左より前列佐野1飛曹、上西1飛曹、成頼中尉、鈴木少尉、岩井1飛曹、後列は整備員（氏名略）

泡を見失はじと見張る追躡艇は波を切って進む、潮を身に浴びて指も千切れそうだ。回天に搭乗せずともこれを真の必死必殺の訓練なり。意気込む眼に亦薄被る。而して搭乗の日を目指して希望の日は続く。

やがて一月六日、東島中尉に同乗D2、回天搭乗の肝既にすわる。

分隊長、分隊士のご配慮厚く、一月二十日遂にB1搭乗と決定。其の時の予の心中、今思うたに彷彿たり、予も出生以来十九有半才の教育の神髓亦努力の結晶は、この回天によりて發揮されるなり、予の生命こそ回天なりと確信するなり。基礎訓練は二月十一日紀元節の口をもって終了。

その後出撃命令を待つのみであった。この間白電隊の赤近、伊東、猪熊等と親しく交際す。実に彼等は万人の範たる人物なりき。如何に航行艦襲撃を学び、習得し、来るを待ちありしや。

二月下旬、三月二十五日出撃と決定す。実に我分隊の最初なりき。然るに予定に変更、当時予の慨嘆誰か知れるや。以来三ヶ月、精神の修養に、死の訓練に如何に邁進せるか。

特に第七分隊二班の班長を命ぜられしより一ヶ月、殉皇隊と命名。班員十四名

真壁三男 新潟 細島基地九州

白木一郎 福岡 イ58潜 宮崎県

浅井琢朗 愛知 細島

林 義明 台湾 イ58潜

小島勝治 京都二商

高坂 忍 長野

須崎一河崎春美 京都三中夜間（本）

山口県

水田義次 熊本 静岡基地

今藤真佳 鹿児島

中井 昭 大阪 イ58潜

浦戸↑樋口幸彦 香川

高島三成 福岡

浦戸↑刈田吉郎 新潟

佐野 元 京都

以上十四名

良く一致団結十四名共に死なんの決意固く、輝やかしき日が続きたり。魚雷機構研究に班員一致協力、予の知れることは全て語り、研究し合ひし殉皇隊なりき。特に刈田吉郎とは信じ合たる仲にて、共に訓練に勉学に精進せるものなりき。彼は今や高知県浦戸の基地にて敵の来たるを待つ。

一方予は太平洋に敵を求めて南進中、意気相通じて轟沈必ず全ったし。予は信する所疑わず。

この班員十四名、二月二十八日、白木、浅井、河崎、樋口、予の五名を残して平生基地に転動す。残留者五名の

悲しみ名状し難きものあり。

その後尚五名中白木、浅井は平生に
転勤、残る所三名。幾度か班の編成替
えのありたる事か。

これも国家の情勢にて、何とも致し
方なし。今や殉皇隊夫々滅敵の意気旺
盛、洋上に亦基地に於て奮戦し有り。

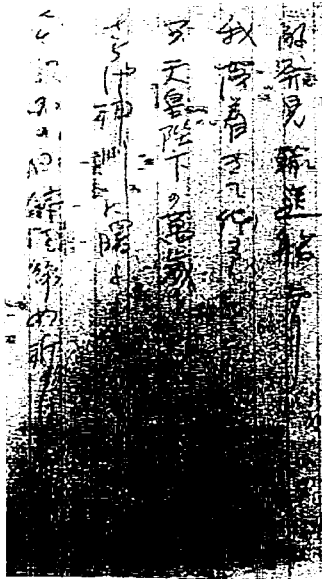
五月二十二日、航行艦襲撃再開、三
宅大尉同乗指導、イルカ運動止らず、
目標艇(曳船)に激突せり。18回搭乗
訓練終了。イ三六六潜の来るを待つ。

七月十四日上陸中、岩井より潜水艦
入港を聞く。しばし胸の躍動するを感
ず。

十五日軍艦旗降下後乗員との対面式
あり、必勝を誓う。明十六日より聯合
訓練開始。

七月十六日 縦舵機故障 久保同乗
十七日 桐丸後方十米通過 八重

樫中尉同乗



回天発進直前の走り書。前掲の通り
「七生報国の白鉢を締め所は轟沈」
で終わっている。白鉢巻と書く積り
だったらうが、巻の字が落ちているこ
とも当時の心情が偲ばれる。

十九日 “船底通過 小林一飛曹
同乗

二十二日 駆逐艦縦舵機故障途中冷
走 戦備的

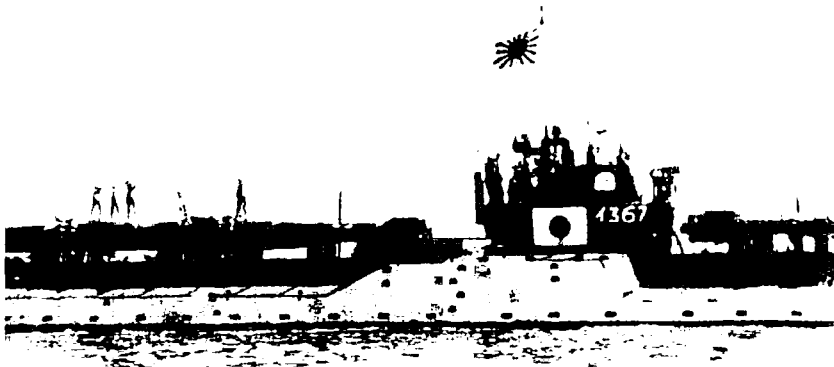
二十五日 “二隻12kt 黎明観測
艦尾通過”
二十六日 “一隻14kt 艦底通過
園田少尉同乗

本日を以て訓練終了、只出撃を待つ
身となりたり。猛訓練を無事終了せる
喜びも大なり。

必ず轟沈の確信を得たり。後は天佑
神助を待つのみ。

訓練に訓練重ね 益良男の
当りて碎けぬ 敵やはあるべき
に。こりと笑って去りし 分隊長
今ありありと 浮かび出てくる

イ363潜出撃の写真は残念ながら見
付からないので、多聞隊イ367(上)
及びイ363(下)の写真を紹介する。



イ367は7月19日大津島を出撃した
が、連日の荒天に敵を発見できず、
8月16日に光に帰投した。



イ363は8月8日光基地を出撃した
が、9日ソ連の参戦で作戦海域を口
本海に変更され、転進中に終戦とな
り18日に帰投した。

第50振武隊出撃時の模様

前号掲載「特攻隊員の母の手記」と題する記事の末尾に、第50振武隊多田良政行大尉の御遺族御存じの方はお知らせ下さい、と付記したところ会員の渡辺博厚氏より次の連絡がありました。

故多田良政行大尉 特操一朗

基本校 大刀洗陸軍飛行学校

御遺族 多田良義行(弟)

広島県三原市木原町二四七六

電〇八四八—68—〇四一四

「特操一朗生史」に第50振武隊の様子を細かく匿名で書かれた婦人記者の記事が掲載されています。

以上のような通知を得たので、多田良少尉の名前を出ている部分だけを左に転載する。題名は「国土を守る若き神々と共に」となっている。

この日に死す

いよいよ攻撃命令は下った。総攻撃の先陣を承る第〇〇振武隊山吹隊斎藤少尉機以下十二機の出撃である。

昨夜の雨に洗はれて冴え冴えと晴れた日であった。昼食前、〇〇司令部へ命令受領に行かれた十二名の方々は、

間もなく元氣よく再び隊舎へ戻つて来られた。どなたも、

ここにこと実に嬉しき

うに、そして光るやうな眼をされてゐた。

「おい。行くか」

残られた隊員の方が、如何にも羨ま

しさうに寄つて来られた。

「うん——。調子がとてもいいんだ」

柳伍長がはずんだ息をして答へられた。

「途中グラマンに気をつけろよ」

「調子悪かつたら無理するな。俺が

こんど連れて行つてやる」

交々言はれる戦友の言葉を笑つて受

けて、

「もう俺、今日上つたら、絶対帰つ

て来んからなあ。ペラ止まるまでですつ

飛ばすぞ」

速水少尉が言はれた。

「おい。なるたけでつかいの俺達

の分に残しとけよ」

豪快な小木曾少尉が、

「お粗末ながら猛者揃ひの山吹隊

よ。目ぼしい奴は全部お先にあの世の

土産に持つてゆくよ」

「ようし。冥土で土産の較べつこし

よう。俺は水もしたゝる大空母を引つ

下げてゆくからな」

賑やかに談笑されながら、未練げも

なくせつせつと遺品整理をやつておら

れる方々の何といふ健やかな後姿であらう。

まだ少年のやうに初々しい松崎伍長

は、そつと母上の写真を出して眺めて

をられたが、やがて暗れ暗れと再び飛

行服の奥にしまはれた。一心に腰に吊

したマスコットのリボンを結び直して

をられるのは大野伍長である。

当番兵がうやうやく入つて来た。

そして、

「口今からお昼食を召上られますか」

と、いんぎんに問うた。

「いらんいらん。もういらん。」

「その代り、夕食に梅干し入りの握

り飯を作つてくれ。小つちやいのだ

ぞ。飛行機の上でポイポイと食ふか

ら——」

たつた一人ふだんの通りに昼食命じ

て、隊員達の賑やかなさわざの中、静

かに箸を取られたのは隊長の斎藤少尉

であった。丈の高い肩幅の広いそして

白哲なその顔に一種老成した品位を備

へられた若い隊長であった。たゞ一人

ゆつくりと箸を運ばれる隊長は、自分

が十一名の生命と任務を預かつてゐる

のだといふ大きな責任をじつくり味つ

てをられるやうな御様子であった。

隊長の傍らに直立して、「軍人二賜

リタル勅諭」を小さく呟くやうに拝読

されてゐるのは第二隊長の多田良少尉

である。小柄な第二隊長の精悍な横顔、その不動の姿勢にはみちんのゆる

ぎもなかつた。正しく拝読を終へられ

て、隊長の残された食事を眺めると、

「隊長殿のお余りを頂戴しよう」と

立つたまゝにここにこことうまさうに平ら

げてしまはれた。

「隊長殿、高度はやはり〇〇〇で行

かれますか」

航空地図の上に青鉛筆でコースを記

してをられた飯高伍長が、少女のやう

に長い睫をあげてかう言はれた。

「うん。攻撃上空に達したら俺が翼

を振るからな。みんな忘れずに散開し

ろよ。それまではどんなことがあつて

も俺について来い」

どつしりと腹の底から出るやうな隊

長の言葉に添へて、第二隊長が、

「な。みんな頑張らうな。隊長殿を

絶対信頼して一緒にいて行かうな」

「それから飛んでゆくときは、みんな

あまり離れるなよ。淋しいから——」

と優しいことを言はれた。

隊長を扶けて第二隊長の涙ぐましい

女房ぶり、そして隊員の方々の「この

隊長なら——」といふ無限の信頼の

じみ出たやうな素直さにあ、隊長を中

心にこの日のために生き、この日のた

めに死すべき誓ひはいま果たされよう

としてゐるのだ。

絶筆

陸軍大尉 多田良政 行 命

昭和二十年五月二十日
沖繩にて戦死
陸軍特別操縦見習士官一期
広島県出身 二十三歳

昭和二十年五月十九日

第八次総攻撃第五攻撃隊(第五十振武飛行隊)

隊員トシテ十五時五十分離陸

沖繩東海岸中城湾艦船必沈攻撃ヲ命ゼラレ出撃ス

目的地到達予定時刻十八時三十分過ぎナリ
右天候不良ノ為一日延期サル

九時四十三分記ス

昭和二十年五月二十日

第五十振武飛行隊山吹隊独力攻撃ヲ命ゼラル
隊長ノ率ナル六機及び多田良少尉ノ率ナル六機
二分レ多田良少尉ハ二番隊長トシテ五月二十日
十六時十分離陸十八時三十分十九時三十分
ノ間南部沖繩中城湾ニ突入ス

十三時三十六分記

陸軍特別攻撃隊

第五十振武隊々員

多田良少尉

寺崎名誉会長のご逝去

副会長 内田 一臣

寺崎隆治名誉会長は、その前日の二月十七日には東郷神社の祈年祭に出席されていた。午後帰宅途上、少し気分が悪くなされたがそのまま帰宅、就寝された。が、翌十八日朝までの間に、たれに告げることもなく旅立されたというと聞く。

寺崎さんという先輩は、生前、陸海軍の研究會、記念式、追悼式などには欠かさずことなく出席される方であった。たれ知らぬ者もない。求められれば喜んで挨拶もされた。列席のなかにはビールの泡の抜けるのを気にする向きもあったが、それも万事承知の上のこと、陰もたじろぎもない話ぶりであった。記憶力のよろしいのに驚くことも度々であった。身を捨ててかかっていることでは、寺崎先輩は日々が特攻であったのであろう。永い間特攻頭影をやっている間にその悲愴感も無くなり、もう少年のように天真爛漫になっていられた。海軍の現役時代には直接特攻を指揮されたことがなかったから、天は、この方に戦後を託してのだからと思う。耳が遠くなられたのも、天がその一途を守るため雑音を遠ざけたのであろう。

われわれ海軍兵学校時代、寺崎大尉は陸戦の教官で、よく出てくる言葉が「猛然たる攻撃」というのであったから、「寺崎もうぜ

ん」というご尊名をさし上げていた。お耳に入っていたはずなのに、別にうれしそうに顔をされた思い出がないので、いまだに確証がない。ある遭遇戦の野外演習で、寺崎中隊は奇襲を受け、格好のつかぬ形勢になったことがある。教官は生徒たちの前で、やあ、負けた負けた、と至極上機嫌であられた。その負けっぷりを賞めてであったが、「猛然」の敬称はその後も取り下げられることはなかった。

兵学校では第五十期。九五歳であられた。八年二月二十一日、粕江の泉龍寺で葬儀が行われた。もう同級生もほとんどいられなくなっているであろう。多くの後輩が集い、別れを惜しんだ。色とりどりの花に埋もれ、勲三等旭日章に参謀肩章という肖像画のお姿は、顔に微笑が浮かんでいた。いつ頃のか知らないが、いずれ四十歳代のはじめごろであらう。まだお若かったなといっそう懐かしさがこみ上げてきた。生き残った者にはこれこそ天の恩恵とも思われるうらやましいばかりの大往生ぶりに、ここからご冥福をお祈り申し上げた。



連合艦隊参謀時代の寺崎海軍大佐 (市川 国雄画)

寺崎隆治名誉会長をしのぶ

評議員 上坂 康

もしも正規の副官の
ように常時お供して
いたら、あるいは2
月17日の不幸は避け
えられたかもしれな
かった。もっとも先生は、私が「お宅

○大長老の大往生
平成8年の冬は東京でも異常に寒い
目が多かった。前年の後半から足腰に
やや不自由を覚えられた九五歳の寺崎
名誉会長は、奥さんや娘さんの忠告も
あって、寒い日は出歩くのを若干控え
ておられたようである。しかし、どこ

までお送りしましょう」と申し上げて
も「そんなことはしなくてもよい」と
言われるのが常であつたから、結局こ
の日も自宅まで独りで帰られたことであつたろう。

も悪い所はなく、気丈で一徹な寺崎先
輩は、諸行事に精励され、平成8年が
明けてからも、元旦の東郷神社新年会
や七日の平成会（寺崎さんを囲む有志
の会）やその他の一月の定例行事に出
席された。ただしさすがに、8日の水
交会新年交礼会には参加されなかつ
た。これは異例のことであつた。

2月17日は東京に降雪があつた。東
郷神社での行事が終わつたのち、東郷
会の江上理事長としばらく話をされて
から辞去された寺崎先生は、調布駅か
ら自宅まで歩いて帰る途中で気分が悪
くなり、近くの交番で休まれた。警察
では名士の寺崎先生なので自宅に知ら
せた。長女の和子さんが駆け付けてタ
クシーで連れて帰り、すぐ寝かしつけ
た。よく眠っておられるようであつた
が、翌朝3時ころ奥さんが着に行かれ
ると大往生しておられた。交番が救急
車をよんでいたら、病院ではなんらか
の手当てをしていたのではなからうか
と、副官の私は残念に思っている。

このような行事の際、ここ六年間い
ろいろと寺崎先生のお世話をしてきた
ので、「副官」と俗称されていた私
は、2月3日の東郷神社節分祭りで先
生のご面倒を看たのが最後になつた。
2月17日の東郷神社祈年祭に先生が参
列されることは承知していたが、私は
他用があつたので欠席した。「副官」
といつても、このように都合がついて
同席した時にお世話するだけである。

○輝かしい戦歴
寺崎隆治名誉会長は、一九〇〇（明
治33）年、群馬県の神官の家に生ま
れ、同県立太田中学校から海軍兵学校

（50期）に進み、一九三二（大正二一）
年に江田島を巣立ち、一九三四（昭和
9）年に海軍大学校を卒業され、昭和
18年11月には海軍大佐に任ぜられた。
支那事変では「勢多」艦長として遼
江作戦で殊勲を挙げて金鶏勲章を授与
された。大東亜戦争では16年10月から
南遣艦隊作戦参謀としてマレー作戦に
従事し、18年3月には空母「翔鶴」副
長としてマリアナ沖海戦で苦戦され
た。その後は霞ヶ浦航空隊戦術科長、
第二航空戦隊先任参謀、大村航空隊司
令等の、主として第一線海軍航空部隊
の要職を歴任された。そして20年1月
軍令部部員兼横須賀鎮守府参謀、同2
月常にも最も尊敬された小澤治三郎司令
長官率いる聯合艦隊の参謀、同6月呉
鎮守府参謀として活躍された。

ということを確認しておられた先生
は、毎月の靖國神社への昇殿参拝を欠
かしたことはなかつた。
昭和53年7月からは特攻慰霊顕彰会
の海軍出身の副会長に就任され、平成
6年6月からは勸特攻慰霊平和祈念協
会の名誉会長として、永年にわたり当
会のために尽力・貢献されたのであつ
た。

しかし戦後五〇年間の寺崎先生のご
活躍は、終戦前のそれをほるかにしの
ぐものがあつた。すなわち日本郷友連
盟副会長、全国海洋戦没者伊良湖慰
霊会会長はじめ、水交會、東郷會、日
本国防協會など常に約二〇の団体の役
員として、献身的に鋭意尽力された。

寺崎先生は身を持するに高潔で公正
無私、私利私欲のない立派な人格者で
あつた。「和をもって尊しとす」と、「一
期一会」が先生の座右の銘だつたよう
である。常にき然とした態度であつ
て、しかも親しさと気安さと人情味が
あり、あれこれ細かいところまで気が
付く思いやりのある人柄であつた。

戦後、寺崎先生が最も努力を傾注さ
れたのは、国民精神の高揚、戦没者の
慰霊顕彰、三自衛隊の融合、若者への
期待などであつた。ことに戦後の国民
精神の作興は戦没者の慰霊顕彰から、

寺崎先生は、毎年春の靖國神社およ
び9月23日の世田谷観音寺における特
攻隊慰霊行事をはじめ、当協会のあら
ゆる行事に皆勤され、「特別攻撃隊」
の発行など種々の事項にわたつて適切
な指導で助言を賜つた。
当会には七七歳から九五歳まで一八
年間にわたつて精勤された訳である
が、常に温かい微笑を絶やさぬ好々爺
として、陸海軍の融和に心を砕いてお
られたお姿には頭の下がる思いがした
ものである。

晩年は耳が遠くなられてイヤホンの調整が悪いと大声を出さないと通じないこともしばしばであった。副官の私は、これは大事だと思った時には必ず筆談にしたものである。しかしそれでも、だれが話しかけてもいつもにこにこしてわれわれ後輩と接しられ、まさに大長老の風格を持った名誉会長であられた。

◎信念の大長舌

寺崎先生は雄弁家であった。あいさつを頼まれると堂々と意見を開陳され、この二年ほどは①皇室の尊崇②靖國の英霊の顕彰奉賛③自衛隊の融和団結と精強化がその主なる論旨であったようである。

しかし、ところ構わず、のべくまくなしに、このような信念を吐露されるのであるから、問題なきにしもあらずであった。寺崎先生の大長舌はつとに有名であり、宴席などでも原稿なしで、十分や二十分のスピーチは普通であった。来賓祝辞でそんなに長くやられてはだれでも迷惑するし、そうかといつて大長老の出番を造らない訳にはいかないのが、乾杯や万歳三唱の音頭を頼まれることが多かったが、なんであろうと登場するや常に堂々たる大演説をされた。

初めて聞く人は、九〇歳と思えぬ雄

弁に感嘆し、その他にも大先輩のかくしゃくたる長舌に寛大な人も少なくなかった。しかし、しょっちゅう聞かされてくる者はまたかということになり、正直なところ不評の声も高かった。当然のことながら「副官」といわれた私のところにしりが持ち込まれたので、私は何度となく寺崎先生に進言したが、いつも「そうか、わかった」と言われるだけで、大長舌は一向に直らなかつた。

あるとき私は「寺崎先輩に二分以内の短いあいさつをお願いしてもらいたい」と頼まれたので、そんな短いのはとてもだめだから、あいさつをたのまないように勧めた。しかしどうしても寺崎先生に出てもらいたいと言う。そこで一分間でできるスピーチの原稿を書き、訳を話して寺崎先生に渡したところが、登場された先生は、私の書いた原稿を手にとってはおられたが、それをいちべつすることなく約十分間演説された。

寺崎先生は、ほかのことはそうでもなかつたが、ことスピーチについては「不動の信念」を持っておられて、副官の言うことを聞かれない頑固な司令官であられた。

○後世への継承

寺崎先生は、執筆活動においてもす

ぐれた業績を残しておられる。海軍の歴史と伝統を後世に伝えるため、「海軍砲術史」の刊行に努力されたのをはじめ、海軍諸先輩の伝記等の出版を主唱し推進された。

昭和20年の連合艦隊参謀のときお仕えて以来私淑されていた小澤治三郎司令長官の生涯について「海軍魂」という自著を刊行され、さらに「回想の提督小澤治三郎」を編さん出版された。

また、新見政一・保科善四郎両中将の伝記刊行にも多大の尽力をされた。

ことに新見中将の伝記は、鳥巢建之助氏（海兵58期、海軍著述家、特攻兵器「回天」作戦時の第六艦隊参謀）と私がお手伝いして平成7年7月に刊行したのであるが、出版記念会以外に打ち上げの会を開こうと考えていた矢先に、寺崎先生が亡くなられたのであった。われわれは、この偉大な寺崎先生のご功績を後世に伝えるため、先生の伝記が何かを編さんすべきではないかと考えており、「副官」と言われた私は、その中心をつとめなければならぬと思っている。

最後に、寺崎先生の長女・和子様の俳句を供えて、先生のご冥福をお祈り申し上げる次第である。

春雪に 父眠りつつ 逝きたもつ

(一九九六・六・一七記)

昨年の特攻観音法要でトルコ武官夫人らを案内している寺崎名誉会長



マリアナ沖海戦記念機動艦隊の会において軍歌を合唱中の寺崎会長と著者 (1995年6月19日)

「特攻隊史研究の一視点」に関して

回天会 山田達雄

さてこの論文の最後に職業軍人と学徒出身者の対比があり、その中で「海軍では比島から沖繩まで特攻戦死の少尉のうち現役海軍少尉は

「特攻」会報第26号に久留米工大教授山口宗之氏の研究報告として表記の論文が掲載された。

歴史を判断するのに現在の法律・価値基準・道徳基準をもってしてはならない。これは大原則である。例へば徳川時代では敵討ちは美徳であったが現代では殺人である。

編集者の注によると山口氏はわが協会々員で明治維新史や現代史専攻とのことであるが、我々は当時の生存者に聞けばすぐ分るようなことを、調査もせず、巷間流布されている東京裁判史観や、現在の心境で当時を判断する曲学阿世の徒の説により、論文を作成し結論を出すのは極めて遺憾で歴史の歪曲であると言えよう。事実を徹底究明することなく、東京裁判史観や日教組教育の判断による針小棒大の南京問題や慰安婦問題等まさに歴史は勝者により作られるもののようなが、我々はこれに組することはできない。毅然たる態度が必要である。

これだけだと当時の海軍当局が兵学校・機関学校出身の現役少尉を、いかにも意図的に温存をはかったように思われるが、その当時飛行機に搭乗できる現役海軍少尉が居たかどうかそれを調べた上で発言して欲しい。特攻作戦が実施された頃は搭乗可能な現役海軍少尉は一人も存在しない。それは当局の意図ではなく、当時の海軍の教育システムにその原因があったと言へる。

当時陸軍では現役飛行将校の養成はつぎのとおりであった。予科士官学校を卒業すると航空専攻者はただちに豊岡の航空士官学校に入

表一 陸士出身者の推移

期	予科士官学校		航空士官学校		少尉	中尉	大尉
	入校	卒業	入校	卒業			
55	13-12	14-11	14-11	17- 3	17- 3	18- 3	19-12
56	14-12	16- 3	16- 6	18- 5	18- 5	19- 8	20- 6
57	16- 4	17- 7	17- 7	19- 3	19- 7	20- 6	
58	17- 4	18-12	18-12	20- 3	20- 7		

表二 海兵出身者の推移

期	兵 学 校		飛 行 学 生		少尉	中尉	大尉
	入校	卒業	入校	卒業			
70	13-12	16-11	17- 6	18- 6	17- 6	18- 6	19- 5
71	14-12	17-11	18- 1	19- 1	18- 6	19- 3	19-12
72	15-12	18- 9	18- 9	19- 7	19- 3	19- 9	20- 6
73	16-12	19- 3	19- 3	20- 2	19- 9	20- 3	
74	17-12	20- 3	19-12		20- 7		

校し、ここで15ヶ月、28ヶ月(年次により異なる)の航空術を勉強し同校を卒業、隊付を経て少尉に任官する。即ち航空士官として一人前の少尉が誕生するのである。(別表一)

一方海軍では、兵学校・機関学校の教育は「海上武人」の養成が主眼となっており、在校中に航空教育は行われるが、坐学が主で航空実習も体験教

育の域を出ない。正式の航空教育は卒業後、霞ヶ浦航空隊の飛行学生で実施される。そして初練・中練・実用機の訓練を経て飛行学生を卒業する。

飛行学生の期間は10ヶ月、12ヶ月で、この間に少尉候補生から少尉に任官し、飛行学生を卒業し実施部隊に配属となり、まもなく中尉に進級している。(別表二) 従って航空部隊では第

表三 兵学校出身の戦死者

期	総員A	航空B	戦死者				特攻戦死		
			総員C	C/A %	航空D	D/B %	航空E	E/D %	水中
70	432	180	285	65.9	139	77.2	10	7.1	1
71	581	287	330	56.8	173	60.2	30	17.3	2
72	625	306	336	53.8	202	66.0	37	18.3	8
73	902	502	280	31.0	106	21.1	26	24.5	2
74	1,024	350	17	1.6	2	0.6			

一線で実戦参加の時は全員中尉になっている。なお艦船部隊では候補生から実戦に参加している。
 なお昭和12年以降の海軍の航空教育

表四 飛行予備学生・生徒の戦死者

期	総員A	戦死者B	B/A %	特攻戦死C	C/B %
学生12	69	30	43.4	4	13.3
" 13	5,199	1,616	31.0	448	27.7
" 14	3,323	411	12.4	163	39.6
生徒1	2,197	165	7.5	37	22.4

は概ねつぎのとおりである。
 昭和16年11月卒業の70期までは、兵学校卒業者は全員「練習艦隊」又は「艦船部隊」に乗艦し、海上勤務を経験した後、航空専攻者は霞ヶ浦航空隊で飛行学生として航空術を専攻した。
 昭和17年11月卒業の71期は卒業後2ヶ月の乗艦実習の後霞ヶ浦航空隊へ入隊、一部は更に5ヶ月後に入隊し

た。

昭和18年9月卒業の72期、19年3月卒業の73期は卒業後にただちに霞ヶ浦航空隊に入隊、飛行学生となった。
 昭和20年3月卒業の74期の航空専攻者の半数は、19年12月から生徒のまま霞ヶ浦航空隊に派遣され練習機教程に入り、20年3月卒業と同時に飛行学生となり6月以降実用機教程、7月以降は特攻訓練も開始され46名がこれに参加した。終戦が延びていたら現役少尉の航空特攻戦死も発生したと思われる。

なお19年10月以降、海軍の現役少尉の特攻戦死は回天の3名のみである。
 また参考までに兵学校出身者と飛行予備学生・生徒の総員数と戦死者および特攻戦死者の人数と百分比を別表三と四であげておく。(戦死者には戦病死者・殉職者を含む)絶対数が大きく違うので戦死者数も大差がある。

敬 弔
 田中耕二副会長は六月二十一日、はく離性大動脈りゅう破裂で逝去されました。
 追悼記事は次号に掲載しますが、御縁の深かった方は御投稿下さい。

沖縄摩文仁台上の

義烈空挺隊碑前祭

— 自衛隊員だけで実施 —

毎年5月に碑前祭を行っていることは、この会報に度々掲載しているが、本年も5月18日に全日本空挺同志会沖縄支部主催で、例年通り行はれた。

空挺同志会とは陸軍空挺部隊の戦友達と自衛隊落下傘部隊の隊員及びその退職者で構成されている。沖縄支部の会員はすべて現職自衛官である。沖縄に自衛隊の空挺部隊がいる訳ではないが、習志野の空挺部隊から沖縄の自衛隊に転属になった者や航空自衛隊の救難隊員で習志野で落下傘降下の教育を受けた者など合せて三〇名位いて、その人達で支部を作っている。以前は三人程旧軍の老兵がいたが、全部故人となってしまった。

本土からは自衛隊空挺の退職者である同志会小林会長と現職の空挺団長等が参加したが、本年は旧軍の老兵の参加はなかった。それでも自衛隊音楽隊の支援を得て、沖縄翼友会(陸海軍航空関係者の会)の協賛もあり厳粛に行はれた。
 田中賢一記

全陸軍航空部隊第20回碑前祭

平成8年4月19日
於市ヶ谷台の上の碑
航空碑奉賛同人会

未賓、遺族、会員合計約百名参加し
自衛隊の協力を得て盛大に行はれた



岩宮満会長の捧げた祭文より

大東亜戦争の終結より半世紀を経て我が国は英霊の皆様の貴い犠牲と御加護により一応の平和と繁栄を享受して参りましたが、その半面間違つた東京裁判史観に毒された日本精神喪失の現状は正に眼を覆はしめる情けないものがあります。

恐れ多くも昭和天皇崩御の五ヶ月前昭和六十三年八月十五日の終戦記念日における御製は

やすらげき世を祈りしもいまだならず
くやくもあるかきさしみゆれと

と仰せられあり、国を想い国情を憂い給う大御心には唯々恐懼のほかありません。

大東亜戦争を侵略戦争と糾弾した東京裁判の違法性不法性は未国を始めある各認識者の等しく認める定説であるに拘らず、わが政府の首脳を始め国民の大多数がこの正しい史実を知らうとせず、わが国の目存自衛と東洋平和確立の為の正義の戦争を侵略戦争と誤認し、昨年六月衆議院における戦後五十年に於ける決議や終戦記念日における首相談話に於て、諸外国特に東南諸国に対し植民地支配や侵略を謝罪するなど、愚かにも目を辱めて諸国民の信頼を失い、光輝ある祖国の歴史伝説を穢し名譽を失墜し、英霊の皆様の御

霊を冒瀆し続けております現状は、誠に恥かしく嘆かわしい次第でありまして、御英霊に対し心からお詫申上げるものであります。

私達はわが国民が歴史の真実を正しく認識し、日本の正義を確信してそれに誇りを持ち、心からの祖国を愛し、身を挺して国を守る立派な国民となるよう日本を建て直し、更に進んで人と物両面に亘り積極的な国際貢献の美を掌けて世界の国々から信頼され感謝される日本となるよう努力を傾け尽さなければならぬと存じます。

陸軍航空碑と特攻隊との関係

この碑が建立されたのは昭和52年であるが、その後61年になって「鎮魂」と銘打った田岡型金属製の副碑が主碑の後方両側に建立された。副碑には陸軍航空に属する二一九五の部隊名が刻まれていて、その中には散華した一七三の特攻隊名と、本土決戦の為待機していた三六四の特攻隊名が含まれている。特攻隊の記録を後世に残すことは我々に課せられた使命である。書物は一部を除いてやがては散佚する宿命をもっているが、金石に刻したものは永久不変である。そう思うと、ここに刻まれたそれそれ僅か一行の部隊名に限りない意義を認める。